森町（もりまち）
本茅部（ほんかやべ）1遺跡（2）

―北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財調査報告書―

平成15年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

森町（もりまち）

本茅部（ほんかやべ）1遺跡（2）

ー北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財調査報告書ー

平成15年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は日本道路公団北海道支社が行う北海道縦貫自動車道建設（七飯～長万部）に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した森町本茅部（ほんかやべ）1遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。本遺跡の報告書は2冊目である。

2．調査および報告書の作成は第1調査部第4調査課が行った。

3．本書の執筆はⅠ章－5を芝田直人が、Ⅲ章－1を山中文雄が、そのほかを遠藤香澄が担当した。

4．現地調査時の写真は山中が撮影し、整理作業時の遺物撮影は第1調査部第4調査課笠原　興が行った。

5．石器の石材鑑定は第1調査部第1調査課花岡正光の指導のもと遠藤が行った

6．土器、石器などの実測・トレースは藤内まゆみ、河崎まなみが行った。

7．調査報告終了後の出土資料および記録類については森町教育委員会が保管する。

8．調査にあたっては下記の諸機関、各位からご協力、ご指導を頂いた（順不同、敬称略）。

　北海道教育委員会、森町教育委員会、八雲町教育委員会、七飯町教育委員会、森町教育委員会藤田登、八雲町教育委員会　三浦孝一・柴田信一、松前町教育委員会　前田正憲、私設北海道考古学研究所　横山英介

凡　例

1．本文中の遺構の表記は以下に示す記号を使用した。
　F：焼土

2．遺構図等の方位は真北を示す。遺構平面図の十はグリッドラインの交点で、傍らの名称記号は右下のグリッドを示している。遺構平面図の・小数字とセクションレベルは標高（単位m）である。

3．掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。各図にはスケールを付けている。
　遺　構　1：40　　遺物出土状況図　1：20　　復元土器　1：3　土器拓本　1：3
　剥片石器　1：2　　石　斧1：2　　たたき石1：3　　砥　石1：2

4．遺構の規模については以下の要領で示した。なお、一部破壊されているものについては現存長を（　）、不明のものは―で示した。
　焼　土　　確認面での長軸長×短軸長／確認面からの最大厚（単位m）

5．土層の表記は、基本土層についてはローマ数字で、遺構の覆土についてはアラビア数字で表した。

6．火山灰については下記の略号を用いた場合がある。
　駒ケ岳火山灰d層　　Ko－d　　駒ケ岳火山灰g層　Ko－g
　白頭山苫小牧火山灰　B－Tm　　濁川降下火山灰　　Ng

7．土層説明には『新版標準土色帖19版』（小山・竹原1997）と『土壌調査ハンドブック改訂版』（ペドロジスト懇談会編1984）を引用した。

8．石器の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」（単位cm）で示した。なお、破損しているものについては現存最大値を（　）で示した。なお、実測図中でたたき痕は「V―V」、すり痕は「｜―｜」で範囲を示した。

目　次

例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次

Ⅰ　調査の概要 …… 1
　1　調査要項 …… 1
　2　調査体制 …… 1
　3　調査にいたる経緯 …… 1
　4　調査の方法 …… 4
　　（1）発掘区の設定 …… 4
　　（2）発掘調査の方法 …… 5
　　（3）整理の方法 …… 5
　5　土層の区分 …… 5
　6　遺物の分類 …… 8
　7　調査結果の概要 …… 8
Ⅱ　位置と環境 …… 11
　1　位置と環境 …… 11
　2　周辺の遺跡 …… 12
Ⅲ　遺構と包含層出土の遺物 …… 17
　1　遺構 …… 17
　　（1）焼土 …… 17
　2　包含層出土の遺物 …… 18
　　（1）概要 …… 18
　　（2）土器 …… 18
　　（3）石器等 …… 23
　3　小括ー土器についてー …… 28
一覧表 …… 29
引用参考文献 …… 31
写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

Ⅰ　調査の概要

図Ⅰ－1　遺跡の位置 …… 2

図Ⅰ－2　遺跡周辺の地形と調査区 …… 3

図Ⅰ－3　発掘区設定図 …… 4

図Ⅰ－4　基本土層 …… 5

図Ⅰ－5　最終面地形と遺構位置図 …… 9

Ⅱ　位置と環境

図Ⅱ－1　遺跡周辺の旧地形 ……12

図Ⅱ－2　森町内の遺跡 ……14

Ⅲ　遺構と包含層出土の遺物

図Ⅲ－1　F－1 ……17

図Ⅲ－2　遺物の分布（1）遺物総数・土器総数・Ⅲ群a類土器・Ⅴ群b類土器 ……19

図Ⅲ－3　遺物の分布（2）土器 ……20

図Ⅲ－4　包含層出土の土器（1）Ⅲ群a類 ……20

図Ⅲ－5　晩期の土器出土状況と出土の土器（2）Ⅴ群b類…21

図Ⅲ－6　包含層出土の土器（3）Ⅴ群b類 ……22

図Ⅲ－7　石器等の分布　石器総数　礫・礫片　両面加工ナイフ・石斧・たたき石・砥石 ……24

図Ⅲ－8　包含層出土の石器（1）ナイフ･石斧･たたき石…25

図Ⅲ－9　包含層出土の石器（2）たたき石 ……26

図Ⅲ－10　包含層出土の石器（3）砥石 ……27

表　目　次

Ⅰ　調査の概要

表Ⅰ－1　出土土器一覧 …… 9

表Ⅰ－2　出土石器等一覧 ……10

Ⅱ　位置と環境

表Ⅱ－1　森町内の遺跡（1）……15

表Ⅱ－2　森町内の遺跡（2）……16

Ⅲ　遺構と包含層出土の遺物

表Ⅲ－1　取り上げ層位別出土遺物一覧 ……29

表Ⅲ－2　包含層出土掲載土器一覧（復元土器）……29

表Ⅲ－3　包含層出土掲載土器一覧（拓本）……30

表Ⅲ－4　包含層出土掲載石器一覧 ……30

図　版　目　次

図版Ⅰ－1　土層断面（18～20ライン間）

図版Ⅱ－1　大工川からのぞむ遺跡

図版1　1　遺跡全景Ko－d除去後（北西から）

2　基本土層（北東から）

図版2　1　調査状況（北西から）

2　完掘状況（北西から）

図版3　1　F－1検出（北から）

2　F－1土層断面1（北から）

3　F－1土層断面2（南から）

4　晩期の土器出土状況（1）（西から）

5　晩期の土器出土状況（2）（北から）

図版4　1　晩期の土器出土状況（3）（南から）

2　晩期の土器出土状況（4）（西から）

3　包含層出土のⅤ群b類土器（図Ⅲ－5－1a）

4　粘土の接合面（同左）

5　包含層出土のⅤ群b類土器

図版5　1　包含層出土のⅤ群b類土器（図Ⅲ－5－1b）

2　包含層出土のⅢ群a類土器（図Ⅲ－4－1a）

3　包含層出土のⅢ群a類土器

図版6　1　包含層出土のⅤ群b類土器（図Ⅲ－6－3a）

2　包含層出土の石器（1）両面加工のナイフ・石斧・たたき石

図版7　1　包含層出土の石器（2）たたき石・砥石

Ⅰ　調査の概要

1　調査要項

事　　業　　名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査
委　　託　　者：日本道路公団北海道支社
受　　託　　者：財団法人北海道埋蔵文化財センター
受 託 期 間：平成15年４月１日～平成16年３月31日
遺　　跡　　名：本茅部１遺跡（北海道教育委員会登載番号　B－15－23）
発掘調査期間：平成15年５月６日～６月６日
所　　在　　地：茅部郡森町字本茅部町274ほか
発掘調査面積：498㎡

2　調査体制

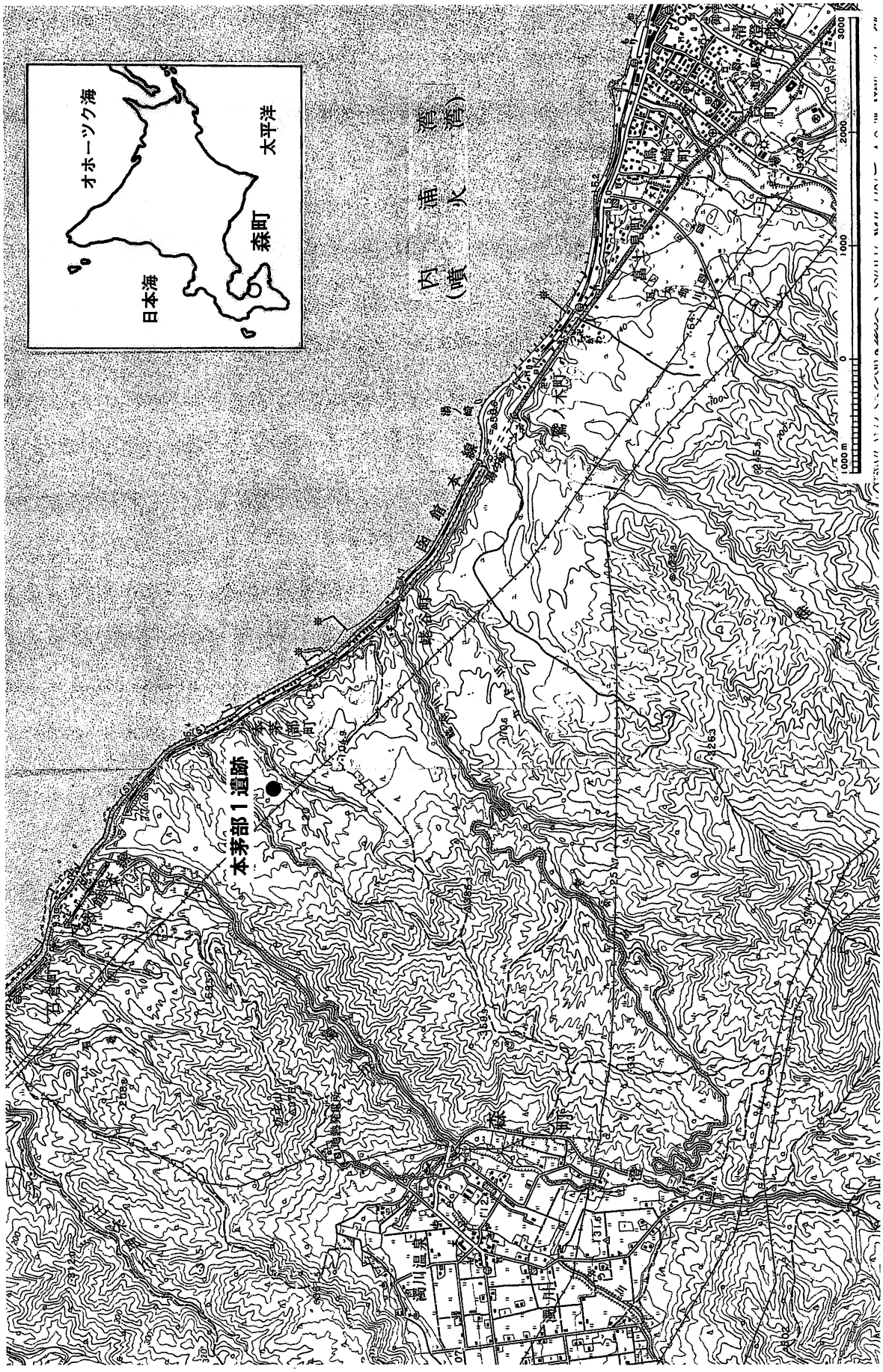
財団法人北海道埋蔵文化財センター
理　　事　　長　森重楯一
専 務 理 事　宮崎　勝
常 務 理 事　畑　宏明
第１調査部長　畑　宏明（兼務）
第４調査課長　遠藤香澄（発掘担当者）
主　　任　芝田直人（発掘担当者）
文化財保護主事　山中文雄（発掘担当者）

3　調査にいたる経緯

北海道縦貫自動車道（函館～稚内間）は函館市を起点として、室蘭市、苫小牧市、札幌市、旭川市を経由し稚内市にいたる総延長681㎞の高速自動車国道である。平成15年10月には士別剣淵ICが開通し、現在長万部国縫ICと士別剣淵IC間の延長約376㎞が道央自動車道として開通している。北海道南部における建設計画は昭和47年に基本計画が決定された。平成元年に七飯～長万部間についての整備計画が決まり、平成５年11月から本格的工事が進められている。このうち平成13年11月に長万部ICと国縫IC間が開通している。

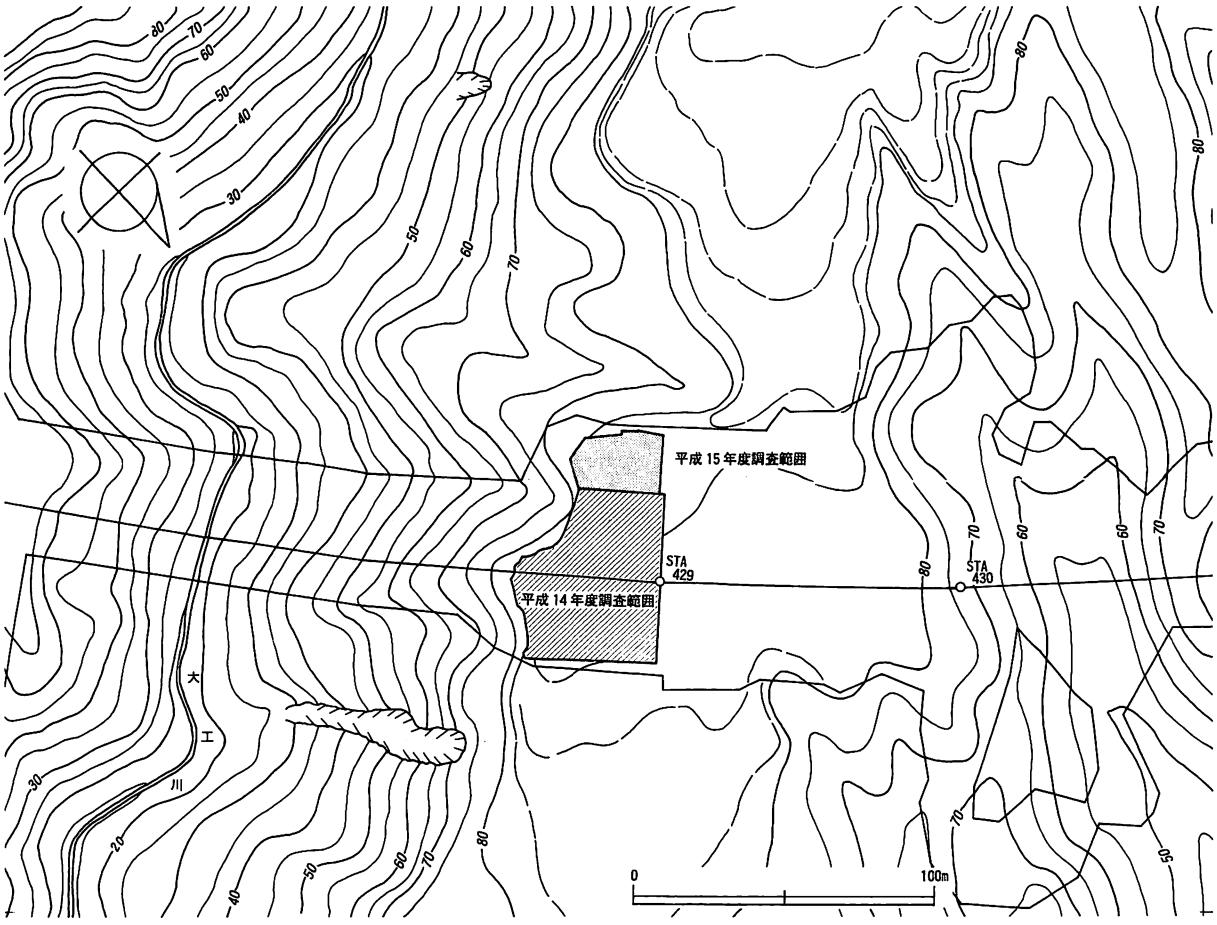
七飯～長万部間の工事に関する埋蔵文化財調査については、平成２年４月に、日本道路公団札幌建設局（現北海道支社）から北海道教育委員会に事前協議がなされた。協議を受けた道教委は平成２年４月に所在確認調査、平成５年から、長万部町から順次試掘調査を開始している。平成10年度から長万部町および八雲町内所在の遺跡の調査がおこなわれ、これらの遺跡については平成13年度にほぼ終了している。

平成13度からは調査は森町内へと移り、（財）北海道埋蔵文化財センター（以下埋文センター）と森町教育委員会（以下森町教委）がそれぞれ道路公団北海道支社から委託を受け実施している。初年度は埋文センターが最も北側に位置する本内川右岸遺跡と濁川左岸遺跡の２か所、森町教委が鷲ノ木４遺跡、栗が丘２遺跡の２か所の調査を行った。平成14年度は埋文センターでは本茅部１遺跡をはじめ５遺跡、森町教委が３遺跡である。平成15年度、埋文センターでは高速道路予定路線の八雲町寄りにあたる三次郎川左岸遺跡から森町市街地にある森川３遺跡まで、この間総延長13㎞、11遺跡合わせて



図Ⅰ－１　遺跡の位置

（この図は国土地理院平成９年発行５万分の１地形図「駒ヶ岳」「濁川」を複製、加筆したものである）



図Ⅰ－2　遺跡周辺の地形と調査区

26,040㎡を対象に調査を実施した。ほかに森町教委が鷲の木４・鷲の木５・鷲の木７・森川２遺跡の調査を行なっている。

この３年間で調査された遺跡は14か所にものぼり、埋蔵文化財調査を必要とする遺跡の数が急増している。なお、平成14年度・15年度の調査遺跡は第Ⅱ章の表Ⅱ－１・２の備考欄に示してある。

本茅部１遺跡については平成２年に所在確認調査が、平成８年６月および平成13年４月に範囲確認の試掘調査が北海道教育委員会により実施され、約3,250㎡が発掘調査を必要とする範囲とされた。その後、道路公団による工事工法の変更などで、2,330㎡が発掘調査範囲となり、平成14年４月、委託を受けた埋文センターでは同年５月から７月にかけて調査を実施した。このときの調査面積は2,200㎡で、調査報告書が刊行されている（道埋文2003　北埋調報191）。また、平成14年度の発掘調査終了後、工事工程等の変更があり、既に調査の終了した範囲の南西側に連続する625㎡が、平成15年度の発掘調査範囲に組み込まれることとなった。

平成15年度は５月６日から６月６日までの日程で調査を行なった。最終調査面積は498㎡で、今年度をもって本遺跡の調査は完了した。

4　調査の方法

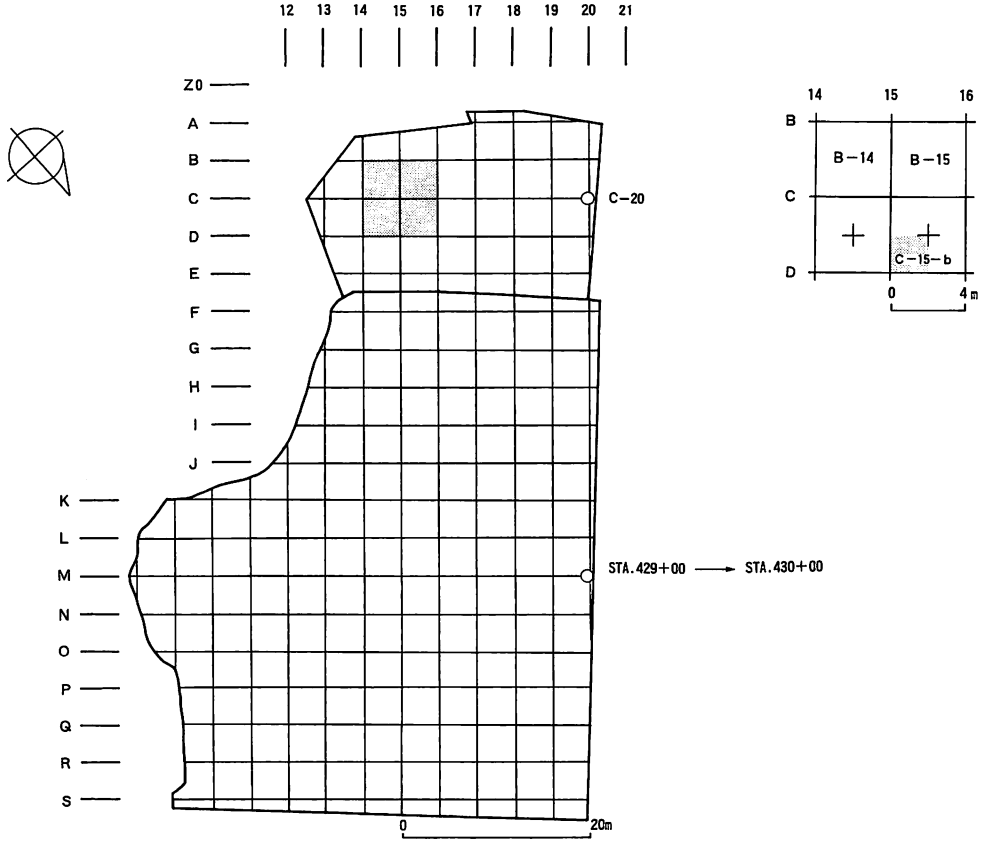
（1）発掘区の設定

発掘区の設定にあたっては基本図として北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）地蔵橋工事（日本道路公団北海道支社函館工事事務所）縮尺1000分の1を使用した。これは函館側を起点にしたものであり、森町内では大きく曲がった路線となっている。このため作成した図面は地図の基本である「北が上」の体裁を取っていない。工事予定中心線上の中心杭であるSTA.429＋00とSTA.430＋00を結び延長しこれを基準のMラインとした（図Ⅰ－2）。Mラインから平行に南西へ向かって4mごとにL、K、…同様に南東へむかってN、O…　とした。Aラインよりも南西側については一巡前としてアルファベットの後ろに「0」を付すこととし、Z0、Y0…とした。また、STA.429＋00を通りそれと直交する線を20ラインとし、平行に4mごと南東に向かい19、18…とした。調査区内ではこれらの直線が交差する地点に杭を打設した。今年度の調査範囲はZ0～Fライン、12～21ライン間に収まる。

発掘区はこの4m方眼を基本としその南端（図左上）の交点のアルファベットと数字との組み合わせで呼称される（例B－14、B－15など）。また、今年度の調査では4m方眼の発掘区を2m方眼に分割（小発掘区）し、遺物の取り上げを行っている。小発掘区は杭のある側（南端）から時計と反対回りにa、b、c、dを付しC－15－bのように呼称した。

なおMラインは真北に対してN－46°50″－Eである。

基準点に用いた中心杭、および調査区内の基準杭C－15の平面直角座標は第Ⅺ系で以下の通りである。改正前の日本測地系による座標も併記しておく。



図Ⅰ－3　発掘区設定図

＊STA.429＋00　（杭番号M－20）
　世界測地系　（測地成果2000）　X＝－206807.735　Y＝20803.368
　日本測地系　（改正前）　X＝－206551.337　Y＝20510.032
＊STA.430＋00　（杭番号M－45）
　世界測地系　（測地成果2000）　X＝－206739.143　Y＝20730.6252
＊基準杭番号C－15
　世界測地系　（測地成果2000）　X＝－206850.558　Y＝20790.478
　日本測地系　（改正前）　X＝－206594.154　Y＝20497.319
　世界測地系　（測地成果2000）　緯度＝42°08′23.6909　経度＝140°29′526.887

（2）発掘調査の方法

4月下旬、発掘調査に先行し建設用の重機を使って表土とⅡ層の駒ケ岳d火山灰を除去し、その後測量の専門家に委託し基準杭と4mの方眼杭を打設した。Ⅲ層上面の地形測量を行った後、ジョレンで精査し、BラインとDラインの6グリッドを対象とする25%調査から開始した。Ⅳ層を2～3回掘り下げた段階で縄文時代晩期の遺物や中期サイベ沢Ⅶ式期の土器が出土する状況が確認できた。移植ゴテと手鍬を使用し調査を行った発掘区では、1回に掘る深さを10cm程度とし、遺物取り上げの際の層位は「Ⅳ層1回目」、「Ⅳ層2回目」…とした。その後、調査進行に伴い、層位的および平面的に遺物分布の濃淡の傾向が把握できたので、遺物の少ない範囲は移植ゴテに加えスコップ、ジョレンを併用する方法に切り替えた。この場合、「Ⅳ層上位・中位・下位」とし、いずれも取り上げの際のポリ袋に明記した。

また、平成14年度の調査において、O－14区でKo－g火山灰層の下位（平成14年度報告のⅦ層）から縄文時代早期に属するとみられる頁岩製のつまみ付きナイフが見つかっていることから、これに相当するとみられるⅦ層上部についても調査の対象とした。ⅣおよびⅤ層漸移層の調査終了後、人力によりⅥ層（Ko－g）を除去し、スコップとジョレンで調査区全域を対象に10cmほど掘り下げた。礫片が出土したがそのほかの遺構、遺物は検出されなかった。

（3）整理の方法

現地では遺物取り上げ後水洗し、分類を行い遺物カードに記入後、遺物台帳を作成した。手書きによる遺物台帳のデータは集計、分布図作成に際しての簡略化を図るため現場段階でパーソナルコンピューターに入力した。注記は石器と土器についてのみ行なった。層位の略記については「Ⅳ層上位」は「Ⅳ上」のように、また、回数の場合は○囲みの数字で示した。「C－15－b区のⅣ層3回目」の場合は以下のとおりである。

遺跡名略称	発掘区（小発掘区）	遺物番号	出土層位
HK1.	C－15－b.	8.	Ⅳ③

11月からの二次整理は、江別市の作業所で行なった。報告書作成に向け遺物台帳の点検、修正、遺物の分類見直し後、土器の接合・復元作業、遺物の実測と作図、記録類の整理と製図、集計、分布図作成、遺物写真の撮影等作業を行なった。土器については、現場での一次整理の段階で分類ごとに大まかに個体識別し簡単な接合メモを作成していた。中期と晩期に属する資料がそれぞれ1、2個体、全体の器形が復元できることが予想できていたので、特に接合作業に時間をかけ入念に行った。復元土器の実測にあたっては、断面は器形の特徴を表わしている部分を表現するため、90度回転した位置

で実測したもの、現存部分を実測し復元したものがあり、その場合、実測位置は▼で示してある。晩期の土器については展開図も作成している。破片資料については、全体の出土量が少ないことから復元できた個体の残片の一部を除き、ほぼ全点を拓影図で示した。同様に石器も破片を含め出土した全点を掲載している。礫・礫片については石質を観察し、重さをはかり台帳に記載した。整理終了後の遺物は報告書掲載のものとそれ以外のものに分け、報告書掲載のものについては図版に対応するよう1点ずつ収納した。（遠藤香澄）

5　土層の区分

本遺跡は濁川カルデラ起源の火砕流台地の上に立地している。この基盤となる濁川降下火山灰（約12,000年前）の上位に、駒ケ岳起源のKo－g（約6,000年前）、Ko－d（17世紀）、白頭山起源のB－Tm（10世紀）、およびこれらを供給源とする腐植土層が堆積する。

基本土層は以下の通りである。平成14年度の調査でやや不明瞭であったⅢ層以下の層序について検討し、若干の改定を行った。ただし、遺物包含層の主体となるⅣ層は昨年度と同じ層序である。また、調査区の南側は樹木伐採のための林道により、Ⅰ～Ⅷ層が撹乱されている。

Ⅰ層：表土。層厚0.20～0.80m。近世以降に発達した腐植土層。

Ⅱ層：駒ケ岳火山灰d層（Ko－d）。層厚0.80～1.20m。1640年降下の火山灰。

Ⅲ層：腐植土。層厚0.01～0.05m。B－Tmと推測される火山灰を土材の一部とする土壌。微細な炭化物が混在する。

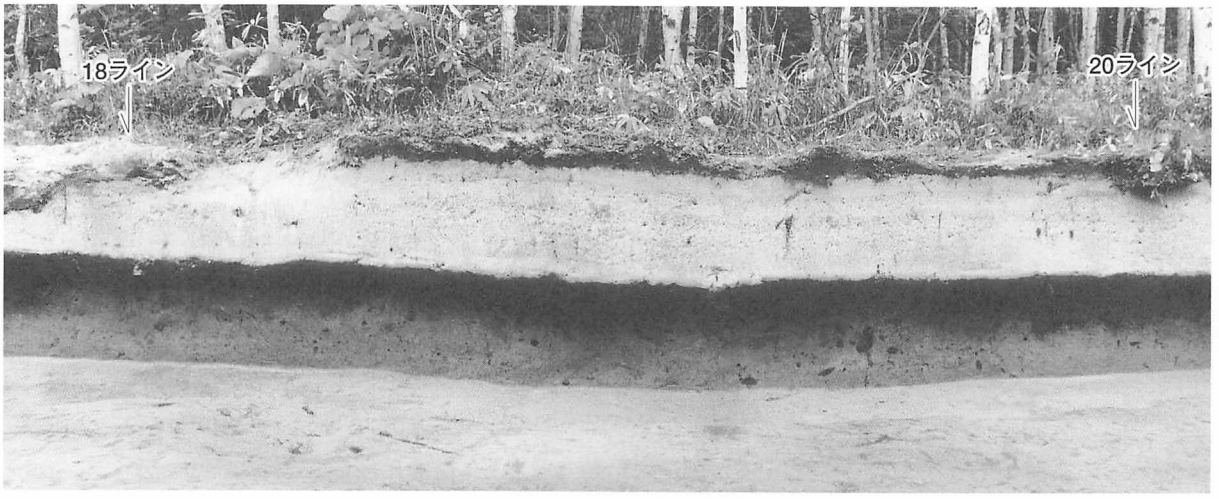
Ⅳ層：腐植土。層厚0.10～0.30m。上面に核塊状構造をなす団塊土壌が見られる。また、上部に白頭山苫小牧火山灰（B－Tm）を挟在するが、風倒木痕のくぼみなど部分的にしか見られない。

Ⅴ層：漸移層。層厚0.05～0.20m。昨年度の報告では「Ⅳ～Ⅴ層」とされていた。

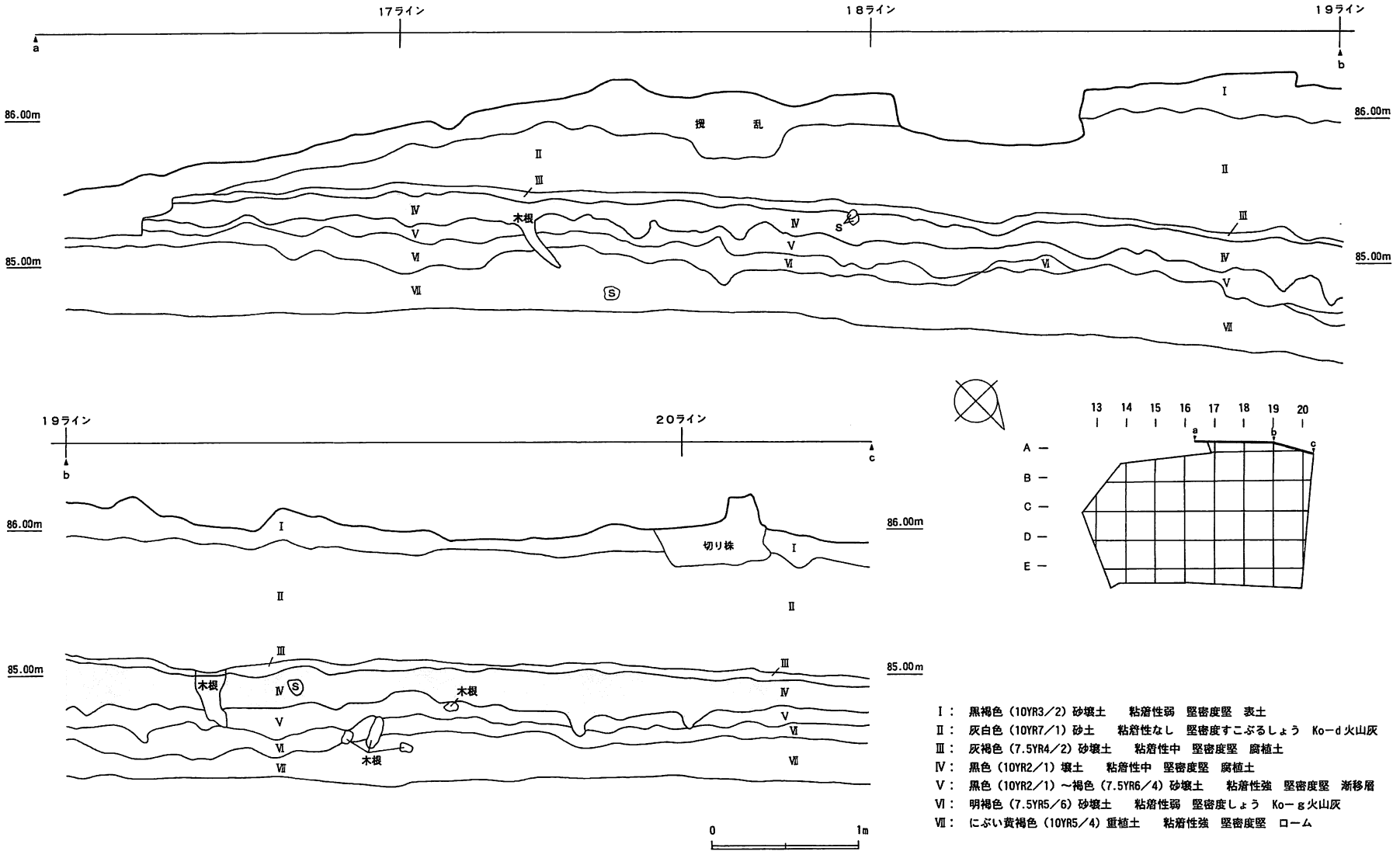
Ⅵ層：駒ケ岳火山灰g層（Ko－g）。層厚0.20～0.30m。約6,000年前降下の火山灰。

Ⅶ層：濁川降下火山灰層（Ng）。層厚1.10～1.30m。約12,000年前に降下したもの。上～中部は風化によりローム質化している。下部にフォール・ユニットが認められる。

Ⅷ層：濁川カルデラ起源の火砕流堆積物。層厚2.00m以上（下底は未確認）。調査区南側の掘削面の観察では、上部1.00～1.50mには極粗粒砂～細礫が大半を占め、中部以下では中礫～大礫が多くなる。これらⅦ・Ⅷ層は「石倉層」と呼称されている。



図版Ⅰ－1　土層断面（18～20ライン間）



Ⅰ：　黒褐色（10YR3／2）砂壌土　　粘着性弱　堅密度堅　表土
Ⅱ：　灰白色（10YR7／1）砂土　　粘着性なし　堅密度すこぶるしょう　Ko－d火山灰
Ⅲ：　灰褐色（7.5YR4／2）砂壌土　　粘着性中　堅密度堅　腐植土
Ⅳ：　黒色（10YR2／1）壌土　　粘着性中　堅密度堅　腐植土
Ⅴ：　黒色（10YR2／1）～褐色（7.5YR6／4）砂壌土　　粘着性強　堅密度堅　漸移層
Ⅵ：　明褐色（7.5YR5／6）砂壌土　　粘着性弱　堅密度しょう　Ko－g火山灰
Ⅶ：　にぶい黄褐色（10YR5／4）重植土　　粘着性強　堅密度堅　ローム

図Ⅰ－4　基本土層

なお、平成14年度の調査ではⅦ層（Ng）の直上に層厚0.01～0.03mの「Ⅵ層：漸移層」が報告されているが、今年度の調査範囲内では、これに該当する層序を確認できなかった。本来ならば、Ngを主な母材として腐植土へ「漸移」していく過程があったと考えられる。しかし、NgとKo－gの降下年代には、約6,000年間と推測される時間的間隔があるが、本遺跡において腐植土層の発達は見られない。当時の気候や植生などの影響により、土壌化するまで腐植が十分に供給されなかったことに起因するのであろう。

今年度、遺物は風倒木による攪乱等でⅢ層から出土する一部のものを除きⅣ層より出土した。昨年度は、Ko－d直下のⅢ層より、17世紀のものと考えられる小刀が出土している。また、Ko－gの下部（Ⅶ層上位？）からは、つまみ付ナイフ１点が出土しており、縄文時代早期のものと推測されている。調査最終面はⅦ層上位である。　（芝田直人）

6　遺物の分類

（1）土器

土器は縄文時代早期に属するものをⅠ群とし、以下前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群とした。続縄文時代のものはⅥ群、擦文時代のものはⅦ群である。平成15年度の調査ではⅢ群とⅤ群土器が出土している。Ⅱ群、Ⅲ群、Ⅴ群は以下のように細分した。

Ⅱ群　縄文時代前期に属する土器群

a類　縄文の施された丸底、尖底の土器群

b類　円筒土器下層式に相当するもの（平成14年度の調査で出土している）

Ⅲ群　縄文時代中期に属する土器群

a類　円筒土器上層a式、円筒土器上層b式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当するもの

b類　榎林式、大安在B式、ノダップⅡ式、煉瓦台式に相当するもの

Ⅴ群　縄文時代晩期に属する土器群

a類　大洞B式、大洞B－C式に相当するもの

b類　大洞C_1式、大洞C_2式に相当するもの

c類　大洞A式、大洞A´式に相当するもの

（2）石器等

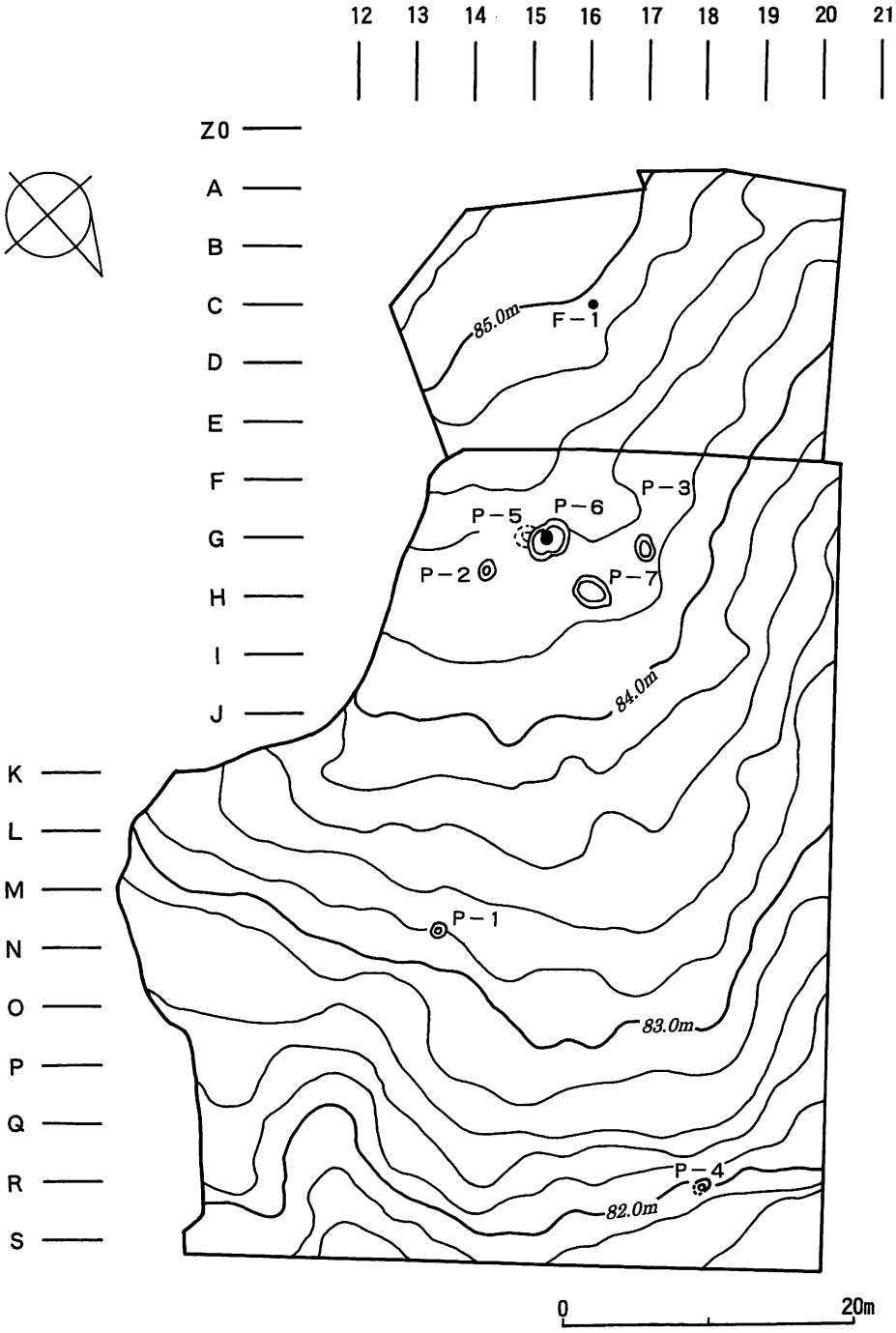
石器は出土量が少ないので器種ごとの大分類にとどめ、記号等を用いた細分は行っていない。

今年度の調査で出土した石器には両面加工のナイフ、石斧、たたき石、細い溝のある軽石製の砥石があり、このほか礫、礫片が出土している。

7　調査結果の概要

平成14年度の調査結果を含め略述する。２か年の調査で検出された遺構は土壙７基、焼土１か所である。遺物は土器が4,436点、石器等が1,262点である。

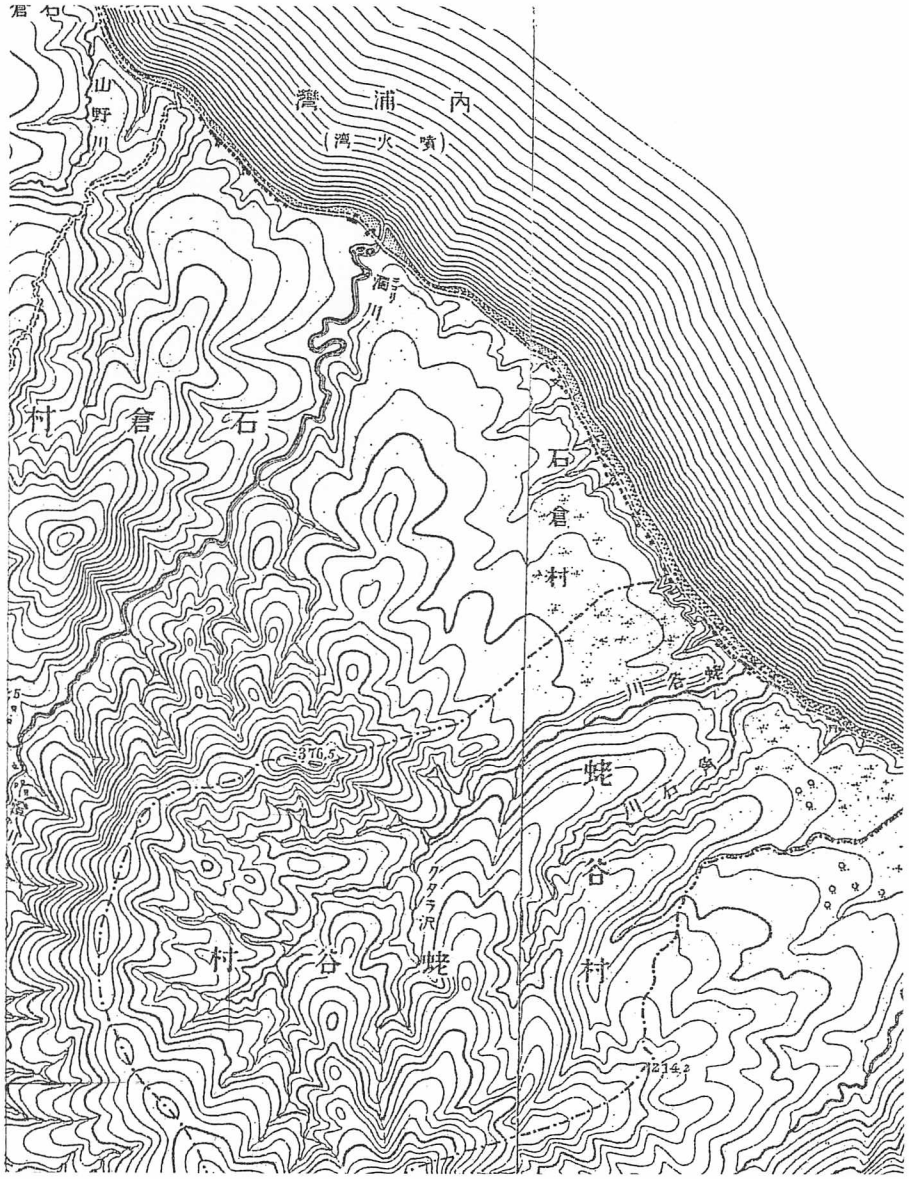
土壙は平成14年度の調査で検出され、いずれも縄文中期前半期円筒土器上層式期のものと予想されている。土器はその９割近くが縄文中期前半期の円筒上層b式とサイベ沢Ⅶ式で遺跡の北側を除きほぼ全域から出土している。ほかに円筒下層d式に相当するものがある。晩期の資料は平成15年度の調査で追加され、大洞C_2式～A式頃の良好な資料がある。石器は剥片石器が少なく、礫、礫石器が多数を占める。また、Ⅱ層の駒ケ岳火山灰直下からは17世紀と考えられる小刀が出土している。



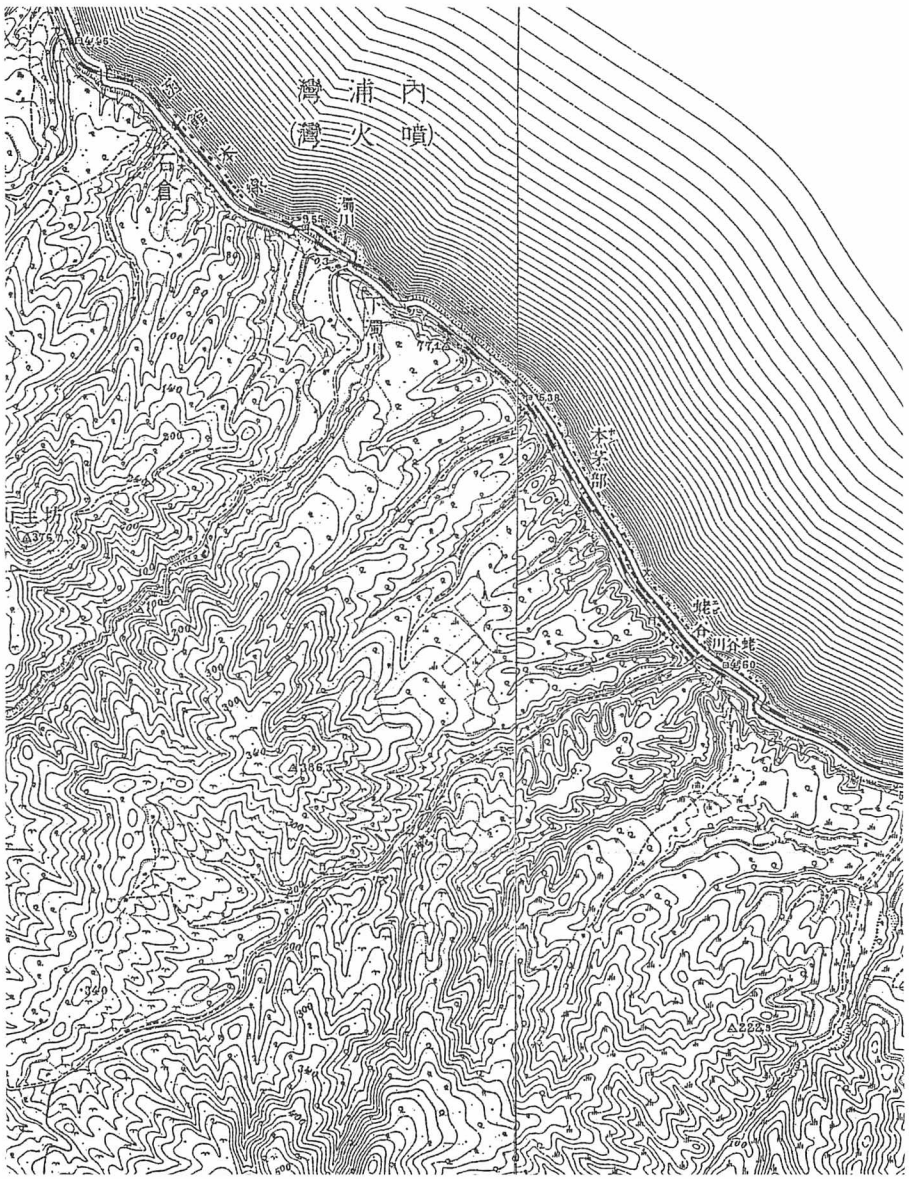
図Ⅰ－5　最終面地形と遺構位置図

表Ⅰ－1　出土土器一覧

	Ⅱ群b類		Ⅲ群a類		Ⅴ群b類		土器合計
	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	
平成14年度		245	103	3710		38	4096
平成15年度				125		215	340
計		245	103	3835		253	4436

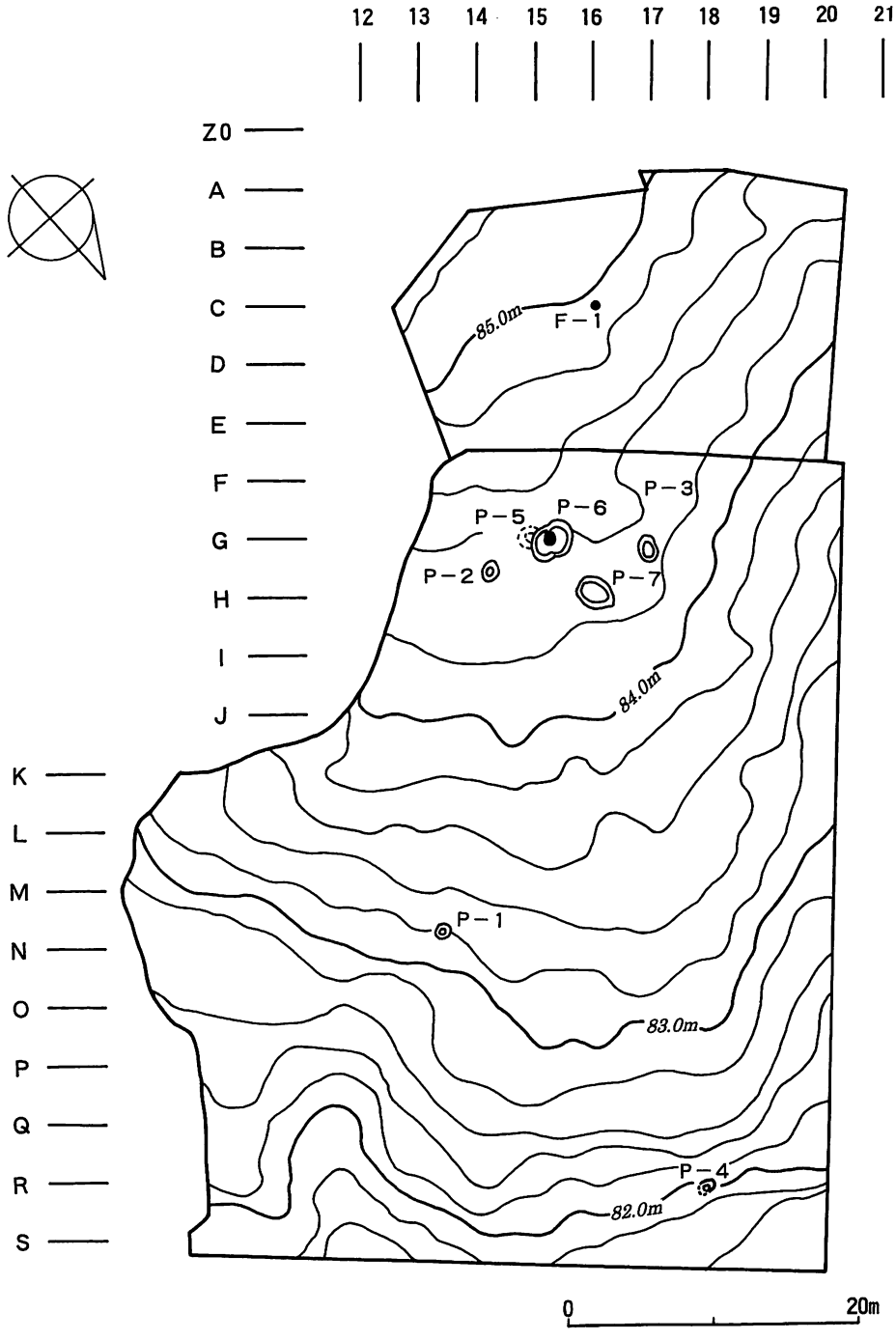


(この図は大日本帝国測量部　明治29年製版仮製五万分の一地形図「駒嶽」「狗神岳」を複製したものである)



(この図は大日本帝国測量部　大正６年製版五万分の一地形図「駒ヶ嶽」、大正９年製版同「上濁川」を複製したものである)

図Ⅱ－１　遺跡周辺の旧地形



図Ⅰ－5　最終面地形と遺構位置図

表Ⅰ－1　出土土器一覧

	Ⅱ群b類		Ⅲ群a類		Ⅴ群b類		土器合計
	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	
平成14年度		245	103	3710		38	4096
平成15年度				125		215	340
計		245	103	3835		253	4436

表Ⅰ－2　出土石器等一覧

	石鏃		石錐		つまみ付きナイフ		両面加工ナイフ		スクレイパー		Rフレイク	
	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層
平成14年度		11		1		15			1	24		4
平成15年度								1				
計		11		1		15		1	1	24		4

	Uフレイク		石核		フレイク		原石	
	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層
平成14年度	1	18		5	3	138		1
平成15年度								
計	1	18		5	3	138		1

	石斧		たたき石		すり石		砥石		扁平打製石器		石皿・台石	
	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層
平成14年度		7	2	42		25		96	2	78	3	52
平成15年度		3		8				2				
計		10	2	50		25		98	2	78	3	52

	礫・礫片		土製品		石製品		鉄製品	
	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層
平成14年度	4	609		1		1		1
平成15年度		103						
計	4	712		1		1		1

石器等合計
1145
117
1262

平成15年度の調査結果

今年度調査区の南端はほぼグリッド線に沿う方向に幅３ｍほどの民有林伐採のための林道があり、そのためⅧ層まで掘削されていた。また、遺跡の南東側は小さな河川大工（だいく）川に臨む急傾斜地で大きく崩落しておりいずれも包含層が失われていた（図版Ⅱ－１）。当初計画では625㎡であったが、発掘終了した面積は498㎡である。

遺構はⅢ層直下で焼土１か所（F－１）が検出された。周辺のⅢ層下～Ⅳ層中位で晩期中葉～後葉の土器が出土していることから当該期の可能性がある。

遺物は土器340点、石器14点、礫・礫片103点の合わせて457点である。その多くはⅣ層中位～下位から出土している。土器は縄文中期と晩期のものである。全体の３分の２ほどが残存する縄文中期前半、サイベ沢Ⅶ式期の１個体分の破片と晩期大洞C_2～A式に相当するとみられる鉢形、深鉢形土器２個体分の破片がある。石器には頁岩製の両面加工のナイフ、泥岩製の石斧とその破片、たたき石、細い溝のある軽石製の砥石がある。ほかに遺跡に人為的に持ち込まれた安山岩を主体とする礫や火を受けて割れた礫片がある。

表Ⅰ－１および表Ⅰ－２に２か年調査で得られた土器と石器等の分類ごとの内訳を示した。

（遠藤香澄）

Ⅱ　位置と環境

1　位置と環境

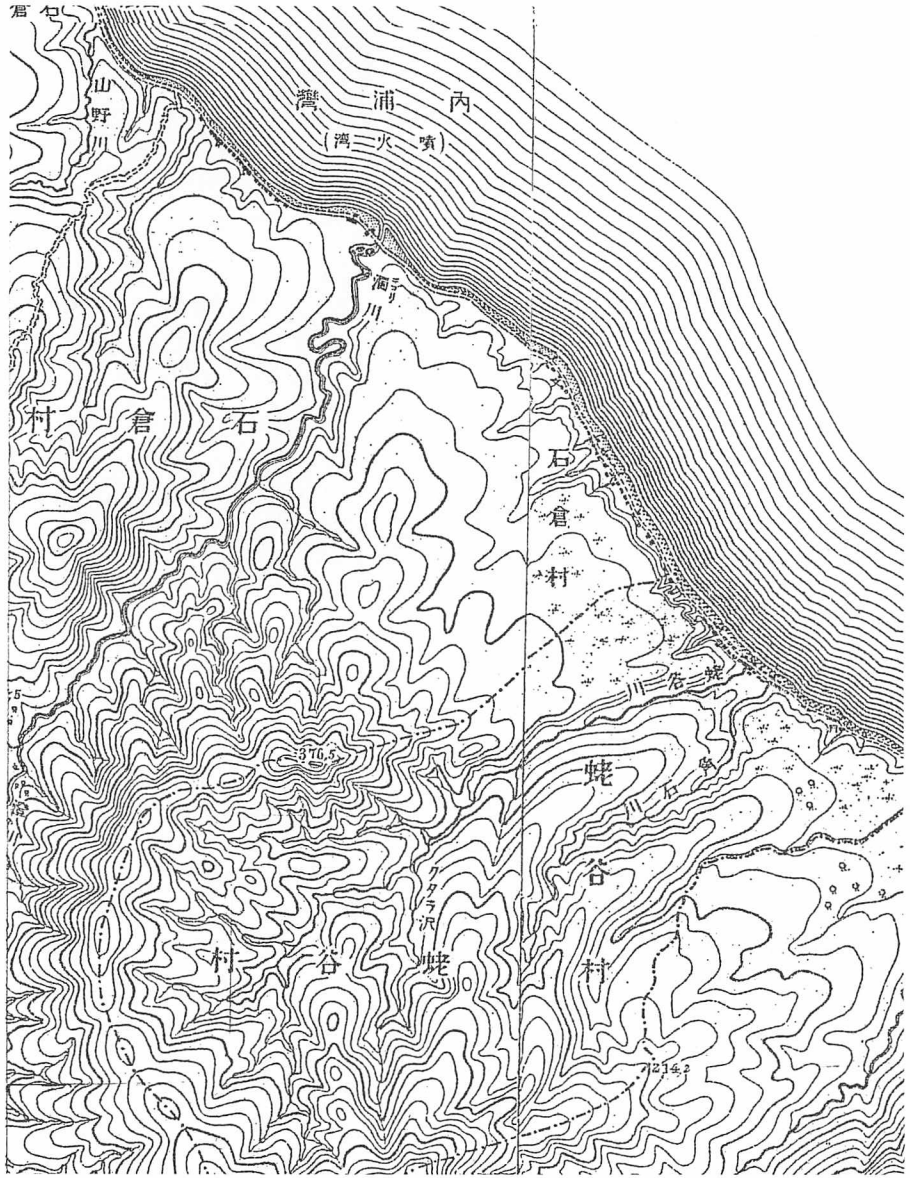
遺跡の所在する森町は北海道南西部、渡島支庁管内のほぼ中央部に位置し、駒ケ岳の裾野西北部に広がる総面積311㎡を有する町である。北海道内には現在156の町があるが「まち」と呼称するのは森町だけで、大正10年（1921）の町政施行時からこの名を登録している。内浦湾に面した東側が押し出沢により砂原町・鹿部町と、北西側は茂無部川を挟んで山越郡八雲町と接している。また、山間部は檜山郡厚沢部町と南は宿野辺を境に亀田郡大野町、南から東は七飯町と接している。

森町は道内でも最も温暖な地域に属する。盛夏でも30℃を越えることは稀で、厳寒期でも氷点下15℃を下回る日はほとんどない。８月の平均気温は20.2℃、１月は－4.9℃で、年間降雨（雪）量は1000㎜前後と道内でもやや少ないほうである。霧は太平洋沿岸としては少ないところであるが、４月から８月にかけてはしばしば発生する。今年度の調査期間中（５月上旬～６月初旬）は肌寒い曇りの日が多く、週に一度は濃霧であった。剣が峰（1,131m）と砂原岳（1,113m）の２つのピークが左右対称を成す美しい駒ケ岳の山容を見ることができたのは、調査終了直前であった。

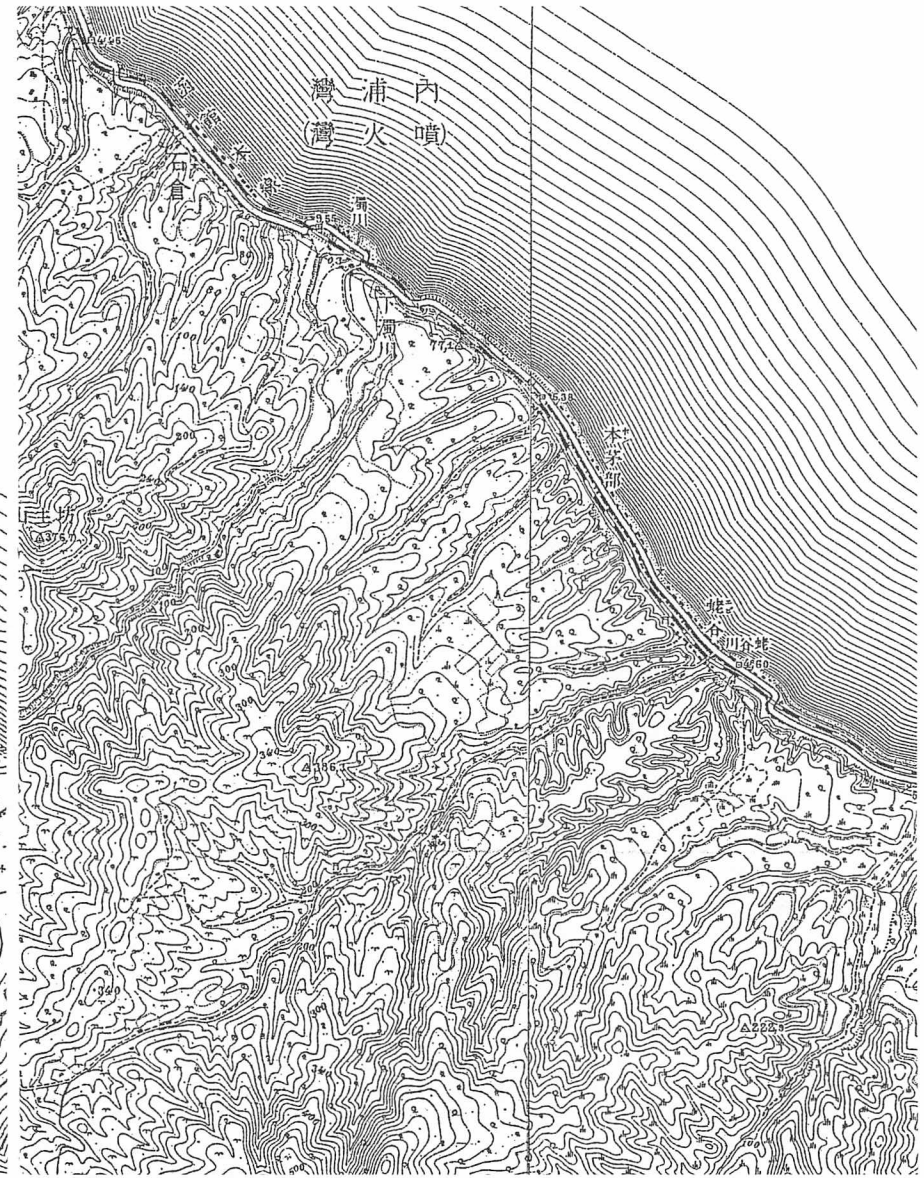
遺跡は森町市街地から８㎞程北西側の字本茅部町にある。国道５号線を八雲町方向に向かい、蝦谷漁港を過ぎてほどなく左折。時には送迎の車輌が後退する程の急傾斜で九十九折の工事用道路を登ってようやく遺跡に到達できる。現在の海岸線からは直線距離にして500mほど内陸部、両側を小河川と沢によって開折された標高82m～86mの細長い舌状の台地に立地する。この台地は約20,000年前～約12,000年前に濁川カルデラから噴出した火砕流堆積物により形づくられたものである。調査区の北西側から南西側にむかって緩やかに傾斜するが、今年度調査範囲は標高85m前後とほぼ平坦である（図Ⅰ－２）。南東側は流路長３㎞に満たない大工川に面する急な崖である。（図版Ⅱ－１）。

本茅部は茅部場所鷲ノ木の持場のひとつとして森・蝦谷古丹・石倉等と並んで『天保松前嶋郷帳』の「従松前東在」にみえる地名である。寛文９年（1669）蜂起のシャクシャインの乱に関連して津軽藩史『津軽一統誌』巻第十の「松前より東下狄地所付」に「かやへ　から家四、五軒」とみえるのが最もはやい（北海道編1969）。寛政年間（1779～1801）は「カヤへ」とよばれており、文化年間（1804～18）になり「本茅部」が一般的になっている（永井編2003）。弘化２年（1845）、当地を通過した松浦武四郎は『初航蝦夷日誌』の中で「本カヤベ人家十三軒。うしろの方岩壁ニ而高し。皆漁者のミ也。」との記録を残している（松浦著・吉田校註1970）。「カヤベ」の地名の由来については、山田秀三は上原熊次郎の説に触れ、「（アイヌ語の）カヤ・ウン・ペ（帆・の・処）から茅部になったとの見方は自然である」。また、「海岸の岩や崖が舟形だと、よくカヤ（帆）を地名とした」と説明している。『永田地名解』には「帆状の秀崖あり…、今其 の帆状見ず」とある（永田1984）。この岩のあったとされる処が蝦谷と石倉の間である（山田1884）。広く森町から南茅部町にいたる海岸線一帯の古くからの大地名であった「茅部」に対して、往時の様子を偲ぶ意味を

図版Ⅱ－１　大工川からのぞむ遺跡



(この図は大日本帝国測量部　明治29年製版仮製五万分の一地形図「駒嶽」「狗神岳」を複製したものである)



(この図は大日本帝国測量部　大正６年製版五万分の一地形図「駒ヶ嶽」、大正９年製版同「上濁川」を複製したものである)

図Ⅱ－１　遺跡周辺の旧地形

こめ、本（アイヌ語でポンー小さいの意ーに漢字を当てたもの）を冠したのだろうか。

2　周辺の遺跡

平成15年12月現在、森町内では41か所の遺跡が確認されている。森町内の遺跡については故熊野喜蔵氏の昭和30年代後半から40年代にかけての精力的な踏査によって発見されたものが多いことはよく知られている（北海道開拓記念館1980）。駒ケ岳や濁川カルデラ起源の火山灰が厚く堆積しているため、北隣の八雲町と比べると確認される遺跡は少なかったが、近年になり、北海道縦貫自動車道建設工事に関連した所在確認調査により発見、調査される遺跡が急増している。

遺跡は内浦湾の注ぐ河川に沿った低位の海岸段丘上、また中位段丘や火砕流堆積物で形成された台地上に多くある。内陸部では宿野辺（しゅくのべ）川流域の３か所と尾白内（おしろない）川上・中域の２か所が知られている。縄文時代各期、続縄文時代、擦文時代、アイヌ文化期までのものがあるが、旧石器時代の遺跡は今のところ見つかっていない。森町内の遺跡についてはすでにまとめられている（北埋調報191）。ここでは近年の発掘調査により遺跡内容が具体的に知られたものについて紹介しておく。

早　期；近年の調査で少しずつ資料が追加されている。御幸町遺跡では器形は知られないが貝殻文・沈線文の土器（藤田1985・1994）、オニウシ遺跡では内外面に貝殻条痕文のある土器が出土している（久保1977）。平成14年度の倉知川右岸遺跡の調査では鳴川式に類する尖底と見られるもの、無文とほぼ全面に貝殻腹縁文による縦位の連続波状文あるいは押引文の施された駒場式に類する平底土器等良好な資料が検出されている（北埋調報196）。今年度の鷲ノ木４遺跡の調査で貝殻文尖底土器が検出されている（北海道考古学会編2003）。

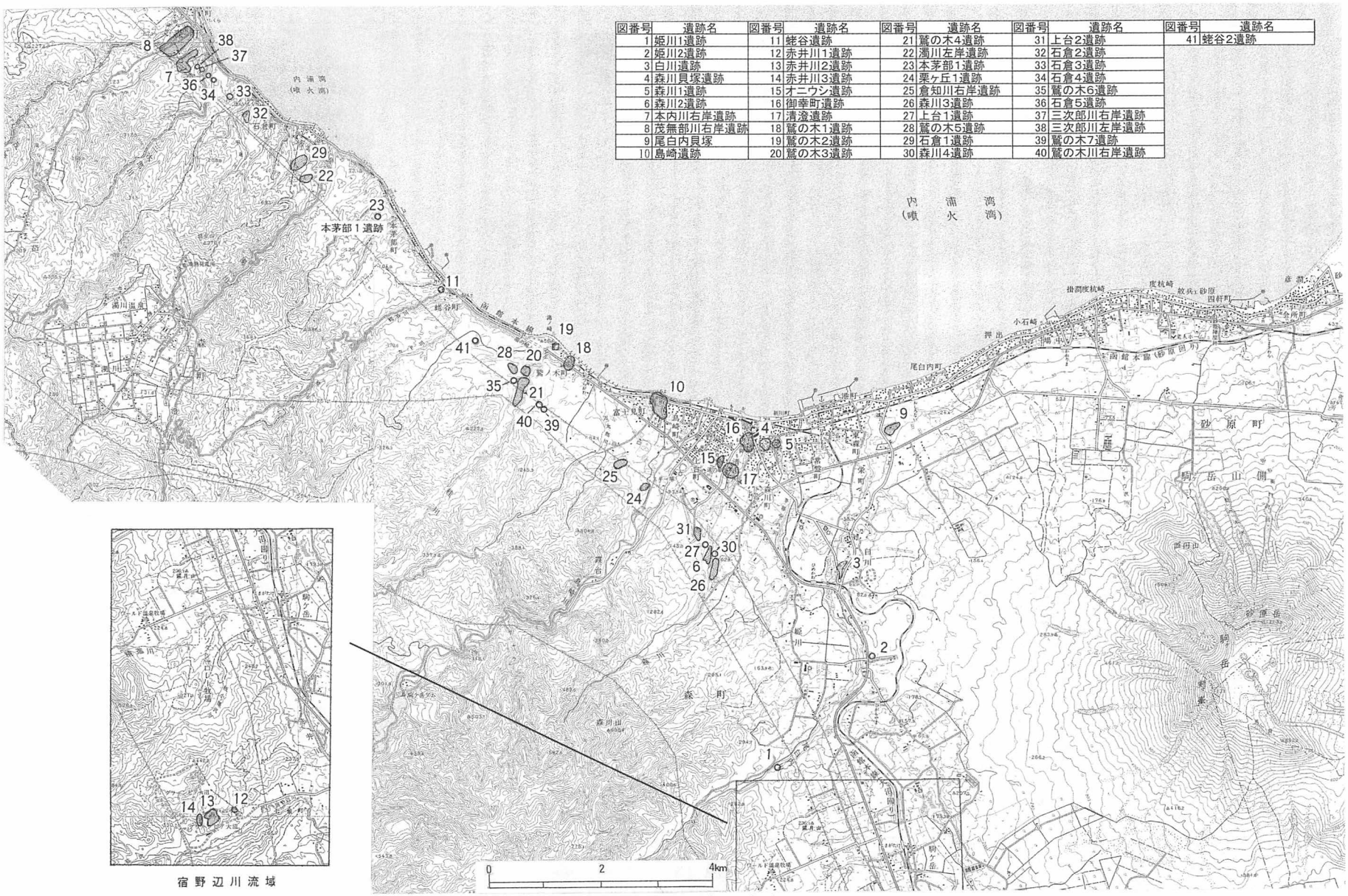
前　期；前半期の遺跡は見つかっていない。後半期の遺跡では熊野喜蔵氏が発見、調査した旧森川A遺跡（統合されて森川１遺跡）が知られている。円筒下層c式に相当する良好な資料が多数あり（熊野・八木1974、北埋調報142）、また後年の調査で住居跡３軒が検出されている（石本1982）。同じく森川貝塚でも円筒下層式が出土している。濁川左岸遺跡B地区では円筒下層d式期の大型の楕円形を呈する住居跡２軒が調査されている（北埋調報190）。

中　期；遺跡数は増加する。オニウシ遺跡では円筒上層b式期の住居跡３軒が、本内（ぼんない）川右岸遺跡では円筒上層b式期と後半期ノダップⅡ式期の墓とみなされる土壙が検出されている（北埋調報182）。濁川左岸遺跡B地区ではサイベ沢Ⅶ式～見晴町式期の小型の住居跡２軒、20基ちかくの土壙が検出されている。御幸町遺跡では榎林式、大安在B式、ノダップⅡ式期の竪穴住居跡31軒や185基にも上るフラスコ状ピット等中期後半期の多数の遺構が調査されている。鳥崎遺跡には中期末から後期初頭（ノダップⅡ式～大津式）の資料がある（佐藤編1979）。

後　期；遺跡は中期と複合するものが多い。高速道路建設関連の調査により中期末以降の良好な資料が多量に追加されている。濁川左岸遺跡では後期前葉トリサキ式～大津式の石組炉をもつ住居跡４軒、土壙30基等が検出されている。同様の住居跡は鷲の木４遺跡、栗ヶ丘１遺跡でも調査されている（北海道教育庁編2001）。倉知川右岸遺跡では住居跡、フラスコ状ピット、配石遺構等がある。鷲の木５遺跡では平成15年度の調査で３重の環状列石と近接する竪穴から墓と見られる遺構が検出されている（北海道考古学会編2003）。

晩　期；昭和55年に第４次の調査が行なわれた尾白内貝塚で、大洞A（最終末）～A´式頃の良好な資料が出土している（千代ほか1981・藤田1993）。本茅部１遺跡には大洞C_2～A式の資料がある。鷲の木４遺跡では平成14年の調査で10数個体の土器が密集して出土、その下部に礫の配された祭祀的性格を持つとみられる遺構が検出されている。

（遠藤香澄）



図番号	遺跡名	図番号	遺跡名	図番号	遺跡名	図番号	遺跡名	図番号	遺跡名
1	姫川1遺跡	11	蛯谷遺跡	21	鷲の木4遺跡	31	上台2遺跡	41	蛯谷2遺跡
2	姫川2遺跡	12	赤井川1遺跡	22	濁川左岸遺跡	32	石倉2遺跡		
3	白川遺跡	13	赤井川2遺跡	23	本茅部1遺跡	33	石倉3遺跡		
4	森川貝塚遺跡	14	赤井川3遺跡	24	栗ヶ丘1遺跡	34	石倉4遺跡		
5	森川1遺跡	15	オニウシ遺跡	25	倉知川右岸遺跡	35	鷲の木6遺跡		
6	森川2遺跡	16	御幸町遺跡	26	森川3遺跡	36	石倉5遺跡		
7	本内川右岸遺跡	17	清澄遺跡	27	上台1遺跡	37	三次郎川右岸遺跡		
8	茂無部川右岸遺跡	18	鷲の木1遺跡	28	鷲の木5遺跡	38	三次郎川左岸遺跡		
9	尾白内貝塚	19	鷲の木2遺跡	29	石倉1遺跡	39	鷲の木7遺跡		
10	島崎遺跡	20	鷲の木3遺跡	30	森川4遺跡	40	鷲の木川右岸遺跡		

図Ⅱ－２　森町内の遺跡

（この図は国土地理院平成９年発行５万分の１地形図「駒ヶ岳」「濁川」を複製、加筆したものである）

表Ⅱ－1　森町内の遺跡（1）

図番号	遺跡名	所在地	立　地	時　期	種別	内容・文献・備考
1	姫川1遺跡	字駒ヶ岳132－1ほか	尾白内川の支流姫川の河岸段丘（167m）	縄文中期（円筒上層）	遺物包含地	昭和37年熊野喜蔵氏調査の旧姫川A遺跡
2	姫川2遺跡	字駒ヶ岳17－216ほか	尾白内川の河岸段丘（112m）	縄文中期（円筒上層）、続縄文	遺物包含地	昭和34年熊野氏調査の旧姫川B遺跡。続縄文の復元土器
3	白川遺跡	字白川49－14	尾白内川の河岸段丘（48～50m）	縄文晩期、続縄文（北大式）、擦文	遺物包含地	昭和37年熊野氏調査。貝塚
4	森川貝塚遺跡	字森川町76ほか	尾白内川の河岸段丘（13～15m）	縄文前期、続縄文（恵山）擦文、中近世	貝塚	旧森川B遺跡、森川町貝塚。昭和38年函館博物館調査。円筒下層式、続縄文土器、擦文式土器、陶磁器、鉄器、古銭が出土。北海道開拓記念館（1980）
5	森川1遺跡	字森川町69－2ほか	低位海岸段丘（15～18m）	縄文前期～後期、続縄文	遺物包含地	旧森川A・C・D遺跡。昭和40年・60年熊野調査。昭和56年森町教委調査の森川A遺跡。住居跡、円筒下層C式の良好資料多数。熊野・八木（1974）、石本（1982）
6	森川2遺跡	字霞台34－1ほか	森川左岸（85～88m）	縄文前期・後期・晩期、土師器	遺物包含地	平成14・15年森町教委調査。埋没樹木類 北海道教育庁編（2003）
7	本内川右岸遺跡	字石倉町610－7・8	本内川右岸台地（40～60m）	縄文中期・後期	遺物包含地	平成13年埋文センター調査（北埋調報182）
8	茂無部川右岸遺跡	字石倉町610－2・5	茂無部川右岸台地（40～60m）	縄文中期・後期	遺物包含地	
9	尾白内貝塚	字尾白内929－1ほか	尾白内川右岸の低位海岸段丘（10～14m）	縄文晩期、続縄文（恵山）、擦文	貝塚	昭和25年発見、同26年東京大学、同33年早稲田大学調査。同55年、平成4年森町教委調査。続縄文（恵山）期の小竪穴・土壙。埋設土器、魚形石器を含む石器集中。　擦文時代の壕。千代（1954）、千代・三浦ほか（1981）、藤田（1993）
10	鳥崎遺跡	字鳥崎31－1ほか	海岸段丘（15～30m）	縄文前期～晩期	遺物包含地	熊野氏調査の鳥崎川遺跡、鳥崎神社入口遺跡を含む。開拓記念館所蔵の鳥崎川遺跡の資料はトリサキ式。配石を伴う土壙。昭和49年町教委調査。佐藤編（1979）、北海道開拓記念館（1980）
11	蛯谷遺跡	字蛯谷町146－1ほか	海岸段丘（30～32m）	縄文中期・後期	遺物包含地	昭和46年森町教委調査。　土器（完形も含む）
12	赤井川1遺跡	字赤井川229	宿野辺川左岸丘陵（175～195m）	縄文中期（円筒上層）	遺物包含地	
13	赤井川2遺跡	字赤井川229	宿野辺川左岸丘陵（230～235m）	縄文中期（円筒上層）	遺物包含地	
14	赤井川3遺跡	字赤井川229	宿野辺川左岸丘陵（210m）	縄文中期	遺物包含地	旧赤井川C遺跡
15	オニウシ遺跡	字上台町326－18	海岸段丘（35m）	縄文早期～中期	集落跡	森町教委昭和51年調査。熊野喜蔵氏最後の調査参加。早期貝殻条痕文土器。円筒上層b式期の住居跡。久保（1977）
16	御幸町遺跡	字御幸町132－2ほか,清澄町3－1ほか	低位海岸段丘（12～15m）	縄文早期～晩期、続縄文、擦文、中世	集落跡	昭和41年発見。森町役場遺跡。縄文早期～擦文時代の重複遺跡。縄文中期末の住居跡31、フラスコ状ピット群。 藤田（1985）、藤田（1994）
17	清澄遺跡	字清澄27・29－2	海岸段丘（33～39m）	縄文中・後期	遺物包含地	旧高校台遺跡。昭和25年森高校教諭小林・千歳氏調査
18	鷲の木1遺跡	字鷲の木145－1ほか	低位海岸段丘（15～20m）	縄文中期	遺物包含地	
19	鷲の木2遺跡	字鷲の木455無番地	海岸段丘	近世	台場跡	伝明治2年榎本武揚鷲の木上陸時の台場跡
20	鷲の木3遺跡	字鷲の木499－2ほか	海岸段丘（40～45m）	縄文中期、続縄文（恵山）	遺物包含地	
21	鷲の木4遺跡	字鷲の木506ほか	桂川左岸段丘（45～50m）	縄文前期～晩期、続縄文（恵山・後北式）	遺物包含地	平成13年・14年森町教委調査。石垣状配石遺構。鐸形土製品、続縄文のガラス玉。　藤田・萩野編（2002）、北海道教育庁編（2003）

表Ⅱ－2　森町内の遺跡（2）

図番号	遺跡名	所在地	立　地	時　期	種別	内容・文献・備考
22	濁川左岸遺跡	字石倉町401ほか	濁川左岸段丘上（40～50m）	縄文前期～後期、続縄文	集落跡	平成13・14年埋文センター調査（北埋調報190）。円筒下層d式、中期前半期の住居跡、後期の石組み炉を伴う住居跡
23	本茅部1遺跡	字本茅部町205ほか	火砕流台地（80～85m）	縄文前・中期・晩期、近世	遺物包含地	平成14・15年埋文センター調査（北埋調報191）。江戸時代初期の小刀。本報告
24	栗ヶ丘1遺跡	字栗ヶ丘38～44	島崎川左岸の河岸段丘上（35～47m）	縄文中期・後期·晩期、続縄文	遺物包含地	平成13・14年森町教委調査。石組炉を持つ住居跡。藤田・萩野編（2002）
25	倉知川右岸遺跡	字栗ヶ丘7ほか	倉地川右岸、小沢との間の丘陵上（75～80m）	縄文早期～後期	集落跡	平成14年埋文センター調査。早期貝殻文、後期の竪穴住居跡、石組炉、配石遺構、土壙、焼土等の集中域（北埋調報196）。
26	森川3遺跡	字森川町317－1	森川の右岸、細い丘陵上（95m）	縄文前期・中期、続縄文（恵山）、近世	集落跡	平成14年・15年埋文センター調査。円筒下層a式。近世の畑跡
27	上台1遺跡	字上台町33－1ほか	森川の支流にはさまれた台地（82～90m）	縄文後期	遺物包含地	平成15年埋文センター調査。　Tピット、石囲い炉、配石遺構、木製品を伴う土壙
28	鷲の木5遺跡	字鷲の木503ほか	桂川支流、上毛無沢川左岸段丘（70m）	縄文早期～晩期、続縄文	遺物包含地	平成14・15年森町教委調査。三重の環状列石と墓とみられる遺構。
29	石倉1遺跡	字石倉町395ほか	濁川支流の左岸台地（38～43m）	縄文早期・中期～後期、続縄文（後北式）	遺物包含地	平成14・15年埋文センター調査。早期貝殻文。調査継続
30	森川4遺跡	字森川317－8ほか	森川右岸（90～95m）	縄文前期～晩期	遺物包含地	平成15年度埋文センター調査。大型フラスコ状ピット、Tピット
31	上台1遺跡	字上台町326－5	火砕流台地（90～105m）	縄文早期～晩期、中・近世	遺物包含地	平成15年埋文センター調査。早期条痕文。中世～近世の畑跡
32	石倉2遺跡	字石倉町306，308ほか	火砕流台地（70m）	縄文中期・晩期	遺物包含地	平成15年埋文センター調査（北埋調報197）。中期後半の住居群　Tピット、石棒
33	石倉3遺跡	字石倉町482ほか	石倉川左岸の台地（65～72m）	縄文後期	遺物包含地	平成15年埋文センター調査（北埋調報205）。配石を伴う土壙
34	石倉4遺跡	字石倉町551、520、521	三次郎川右岸河岸段丘（60m）	縄文後期	遺物包含地	
35	鷲の木6遺跡	字鷲ノ木505、511	河岸段丘（65～70m）	縄文後期	遺物包含地	平成15年度町教委調査。
36	石倉5遺跡	字石倉町512ほか	河岸段丘（55～60m）	縄文中期	遺物包含地	平成15年埋文センター調査（北埋調報205）。調査継続
37	三次郎川右岸遺跡	字石倉町513ほか	三次郎川右岸の段丘（39～45m）	縄文前期～後期、続縄文（後北式）	遺物包含地	平成15年埋文センター調査　中期～後期の集落跡。調査継続
38	三次郎川左岸遺跡	字石倉町610－24ほか	三次郎川左岸の段丘（36～42m）	縄文前期～後期、続縄文	遺物包含地	平成15年埋文センター調査。調査継続
39	鷲の木7遺跡	字鷲の木町397－1ほか	尾根（60m）	縄文中期（円筒上層）・後期	遺物包含地	平成15年度町教委調査。
40	鷲の木川右岸遺跡	字鷲の木町396	台地（60m）	縄文	遺物包含地	
41	蛯谷2遺跡	字蛯谷町281	台地（80m）	縄文	遺物包含地	

＊図番号は北海道教育委員会の登載番号（森町；B-16に続く番号）である。
＊北埋調報は北海道埋蔵文化財センター刊行の報告書のシリーズ番号である。

Ⅲ　遺構と包含層出土の遺物

1　遺　構

平成14年度の調査では、土壙７基が検出されており、いずれも縄文時代中期前半のものと考えられている。今回の調査で検出された遺構は焼土１か所のみである。２か年の調査で検出された遺構の位置は図Ⅰ－５に示してある。

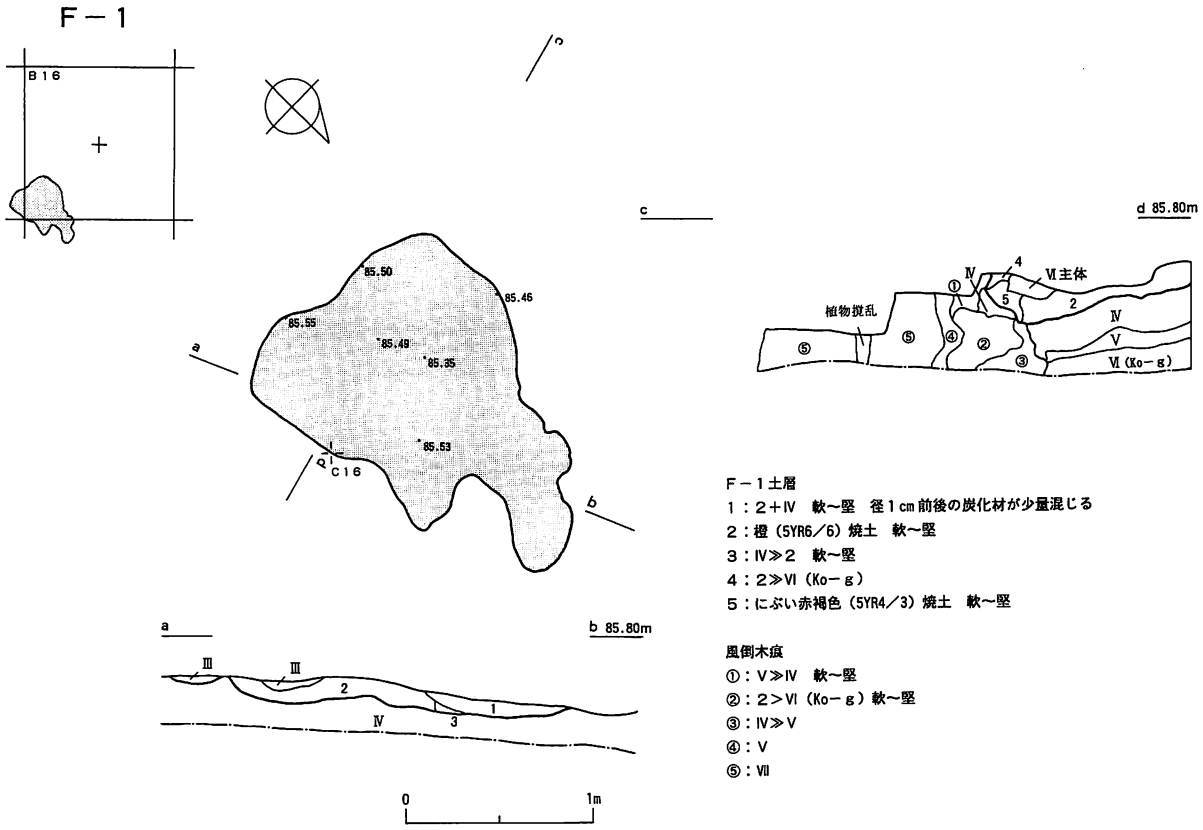
（1）焼　土

F－1（図Ⅲ－１、図版３）

位　置：B－15－c・B－16－b・C－15－d・C－16－a　　**規　模**：1.94×1.34／0.14m

Ⅲ層直下で橙色をおびた土の広がりが不整形に確認された。半截したところ、橙色部分はレンズ状の断面を呈し、堅密土は「堅」であったことから、Ⅳ層の上位が橙色化した焼土であると判断した。周囲から遺物は出土していない。

時　期：断面図の位置ではないが、本焼土がB－Tmより下位にあることを確認している。またⅣ層上位では、縄文時代晩期の遺物が散発的に出土している。両者を合わせて考えると、縄文時代晩期の可能性がある。　　（山中文雄）



図Ⅲ－1　F－1

2　包含層出土の遺物

(1) 概　要（図Ⅲ－2・3・7、表Ⅲ－1）

包含層からは土器340点、石器14点、礫38点、礫片65点の合わせて457点が出土した。分布はまばらで、土器はほぼ2か所にまとまりがある。石器は非常に少なく、散点的に出土するが、土器の分布域とほぼ重なる。遺物はⅣ層3回目あるいはⅣ層中位からその5割以上が検出されている。

(2) 土　器（図Ⅲ－2～6、表Ⅲ－2・3、図版3～6）

土器片340点のうち、縄文中期前葉Ⅲ群a類のものが125点、晩期中葉末～後葉Ⅴ群b類土器が215点である。前者では平成14年度調査範囲からその分布は連続しているが、Eラインでその広がりも途絶える。晩期の土器はC－13・14区を中心とした5、6m四方の範囲から2個体に相当する破片と1個の口縁部が検出された。図Ⅲ－2に2か年で得られた土器の分類ごとの分布図を示してある。今年度調査区については、2mの小グリッド単位で集計した。

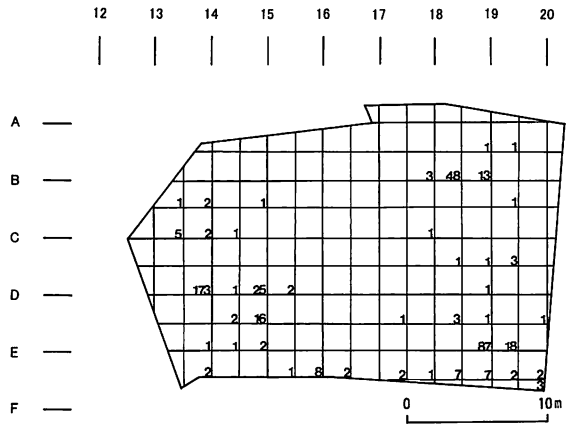
縄文時代中期の土器

Ⅲ群a類（図Ⅲ－4－1～12、表Ⅲ－2・3、図版5－2・3）

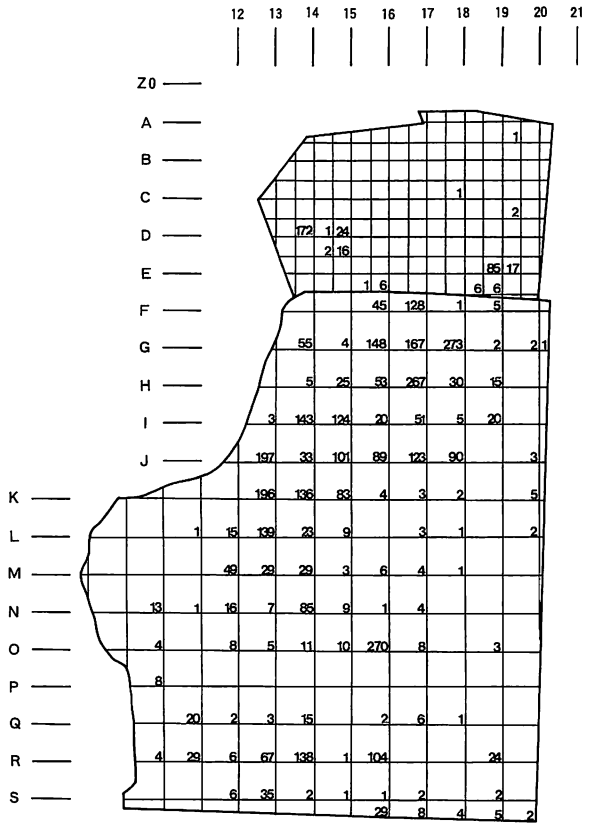
1a～cは主にD－18－c区でⅣ層2回目～4回目まで掘り下げた段階でややまとまって出土したものである。同一個体の破片は周辺の包含層からも出土している。破片は多数あったが接合できず、全体の2分の1ほどが復元できた。4か所に山形の突起部を持つが、2個は欠損している。頂部をわずかに肥厚させ、突起下には楕円形の貫通孔がある。胴部がやや膨らみ底部の張り出しが比較的強い器形である。口縁部から胴部半ばまでは、突起部の頂部を境にLRとRLの原体を使い分けて斜行縄文を施す意図のようであるが、部分的に無文のところもあり規則性はない。胴部下半はLR原体による斜行縄文で、その上位に結節の回転が加えられているところもある。底部周辺の比較的広い範囲は磨かれ無文である。文様帯は突起部周辺と胴上半部に限られ、上下を1条の貼付帯で区画したなかに、2条一組の細い貼付帯により弧線をつなぐ文様が描かれ、突起下の位置には円形の貼り付けがある。貼付帯上と口唇部には縄による刻みがあるが頂部を中心に施文方向を変えている。器面は凹凸があり、内面は底部まで丁寧にミガキ調整がなされている。全体の色調は赤褐色を呈する。胎土には海綿骨針を含み、細かい礫や白色岩片を少し含む。器面に極わずか炭化物が付着する。

2は突起部の一部とみられ、貫通孔がある。L原体による無節の縄文が浅く施文されている。頂部をやや肥厚させ、縄により深く刻んでいる。3a～3cは同一個体の破片。3dの破片は他から10mほど離れた地点から出土している。薄手で、小さな舌状の突起部（3b）を持つものとみられ、LR原体による縄文に結束の回転を加えている。口唇断面は丸みを帯び縄の刻みがある。黒褐色を呈し、胎土に径3、4㎜の礫を含む。内面はよく磨かれている。4は小さな棒状の突起部に複数状の縄線を押捺している。5～12は胴部の破片。いずれも内面は丁寧にみがかれている。5は0段多条の原体による縄文地に細い素文の貼付帯がある。6～8、10は縄文が施されている。9は破片の上部に沈線文がかすかに見える。11は非常に細い撚紐を原体とした羽状を構成する縄文がある。12は厚みのある破片で、ごく浅く施された縄文、半截竹管状工具の腹面による沈線様の文様がある。色調は灰白色を呈し胎土に数㎜の礫を多く含む。5～11とは胎土が異なる。これらはいずれもサイベ沢Ⅶ式である。

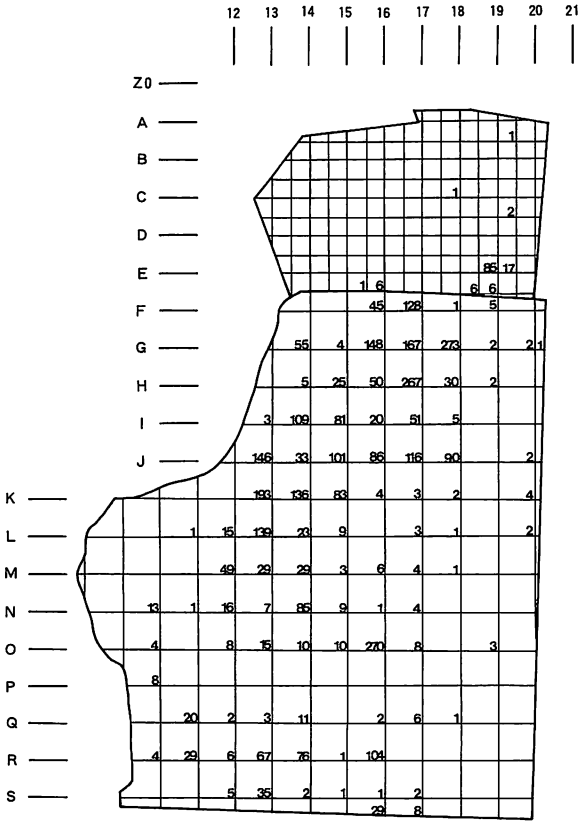
遺物総数　４５７点
土　器　　３４０点
石器等　　１１７点



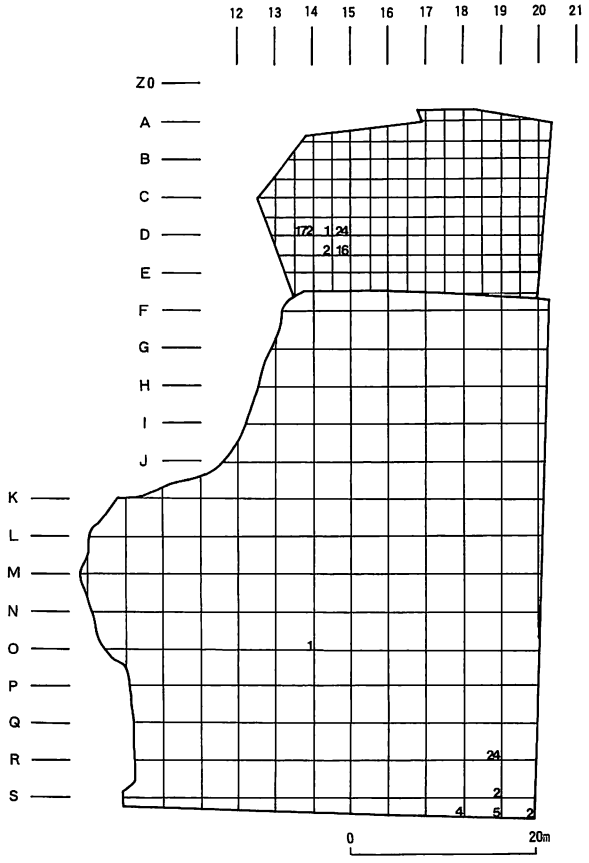
土器総点数　３４０点
４３３３点（平成14年度分）



Ⅲ群ａ類土器　１２５点
３７１０点（平成１４年度分）

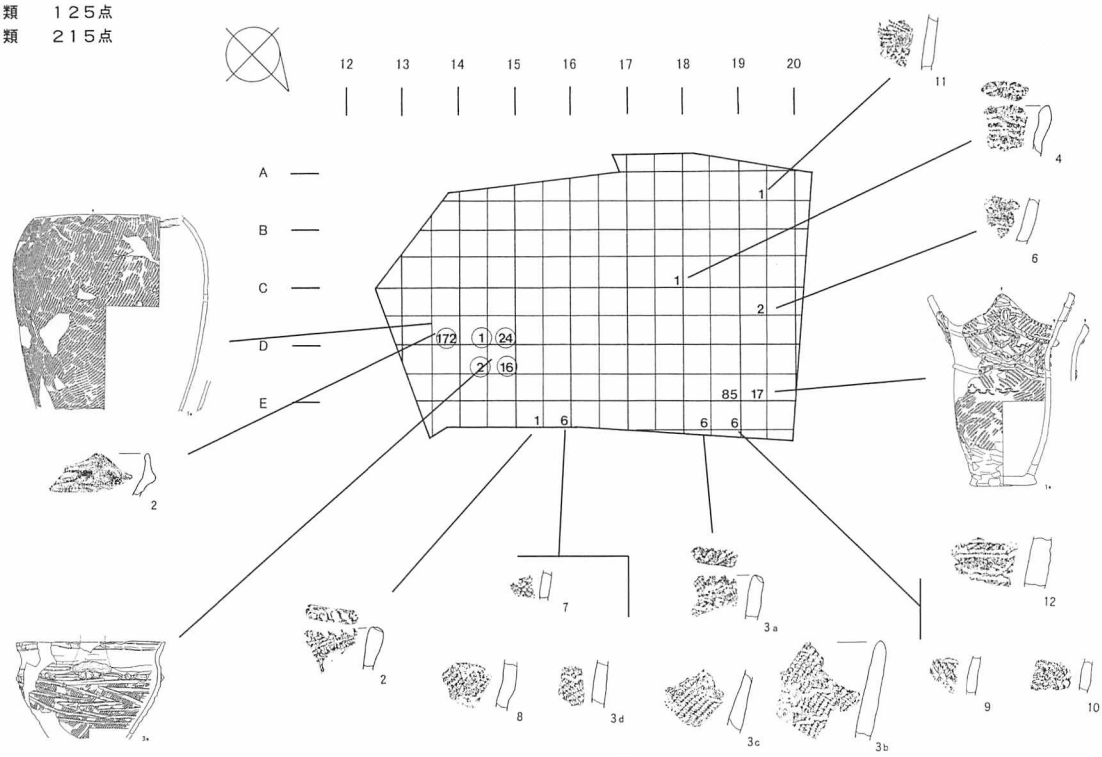


Ⅴ群ｂ類土器　２１５点
３８点（平成１４年度分）



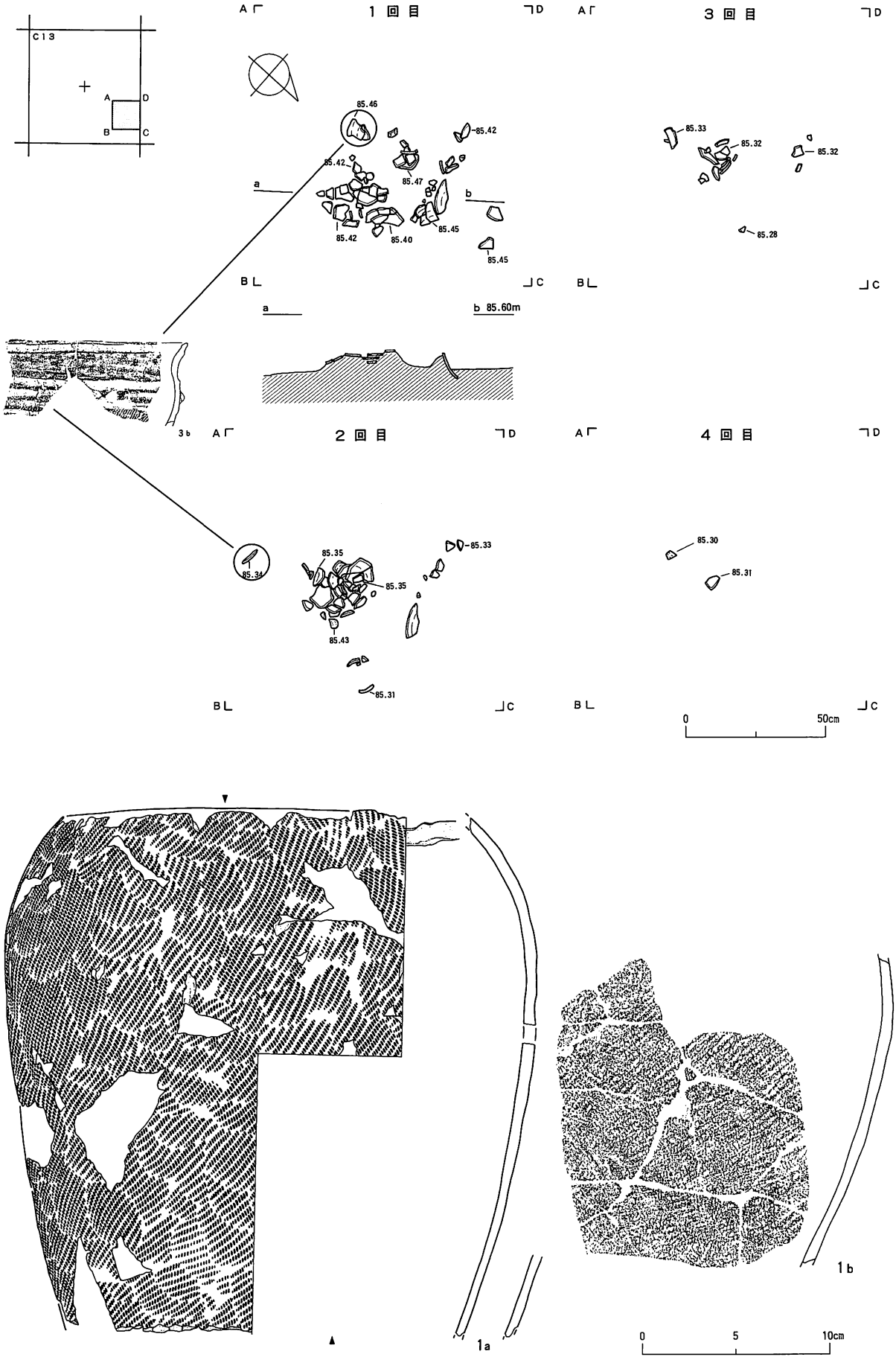
図Ⅲ－２　遺物の分布（１）遺物総数・土器総数・Ⅲ群a類土器・Ⅴ群b類土器

土器総点数　　３４０点
　　Ⅲ群ａ類　　１２５点
○　Ⅴ群ｂ類　　２１５点

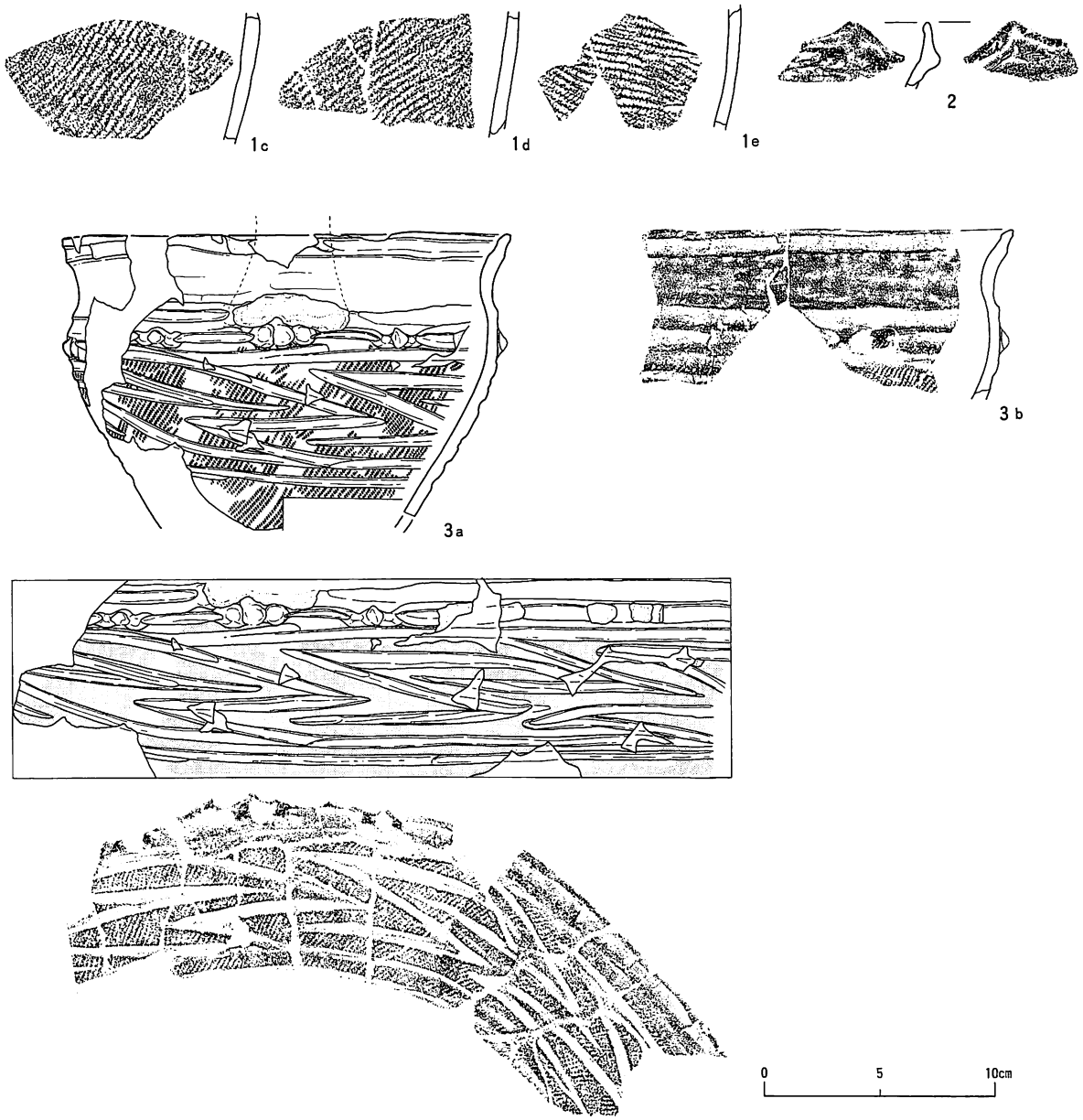


図Ⅲ－３　遺物の分布（２）土器

図Ⅲ－４　包含層出土の土器（１）　Ⅲ群a類



図Ⅲ－5　晩期の土器出土状況と出土の土器（2）Ⅴ群b類



図Ⅲ－6　包含層出土の土器（3）Ⅴ群b類

縄文時代晩期の土器

Ⅴ群b類（図Ⅲ－5・6－1～3、表Ⅲ－2・3、図版3・4・5－1）

1a～1eはC－13－c区Ⅳ層中位でまとまって出土したものである。4回にわたって実測し、これらはほぼ全点に番号を付し出土レベルを測って取り上げた（図版3－4・5、図版4－1・2）。破片は170点以上あったが摩滅しているものも多く、3分の1程は接合されなかった。形になったもののほか（1a）、まとまりとなった破片（1b～1e）を含め掲載する。1aは口縁のくびれ部分から上位と胴部下半から底部をまでを欠くが接合した破片は全周する。上部、下部ともに粘土の接合面で割れている。実測図および断面に現れているが、上部（▼）は上の粘土を内側に貼り付けており、下部（▲）ではその逆である。上部の接合面は残存するすべての破片で観察でき、その幅は6㎜ほどである（図版4－4）。また、下部では接合を容易にするためになされたとみられるが、指頭あるいは棒状の工具で連続

してつけられた浅いくぼみも観察できた。口縁部と底部周辺の破片は一片もないため、全体は知られないが、底部からまっすぐ立ち上がり胴部上半が強く張り出し器形で深鉢形になるとみられる。0段多条のLR原体による斜行縄文が施されているが、胴部の張り出し部よりも上半部では縦行気味になっている。横走気味の部分もある（1e)。施文後は軽くナデ調整をしている。内面は底部付近で縦方向のヘラケズリの痕跡が残るが、ほぼ全面がミガキ調整されている。器厚は5、6㎜と薄手でほぼ全体に均一である。焼成は良好、胎土に黒色の鉱物が目立ち、径5㎜ほどもある礫がわずかであるが混入する。

2は鉢形あるいは浅鉢形土器の突起部の破片。1の土器片に混在して出土した。粘土の貼り付けから左右に幅広の沈線を施文している。内面にも三角状に入り組んだ沈線がある。胎土は3に類し、焼成が良い。

3a・bはC－14－c・d区、D－14－a・d区Ⅲ層上・下部および、Ⅳ層中位、Ⅳ層1回目～3回目の調査で破片が出土した。口縁部の4点の土器片（3b）は1の土器片に混在していた（図Ⅲ－5)。口縁部から底部付近までの5分の4が残存する。胴部下半部から底部にかけて欠損するため、はっきりとは分からないが鉢形とみられる。口縁部の断面は口唇にむかって薄くなるもので、内面に浅く幅広い沈線が引かれ稜が形成されている。口縁部は「く」の字にくびれ無文で、口唇直下のあらかじめ磨かれた部分に幅広の沈線が1条めぐる。数か所に剥落した痕跡があることから、口外帯が形成されていたようである。弱く張り出した肩部にも同様の沈線が3条引かれている。粘土瘤の貼り付け、縦に刻みむように沈線を加え、二つの突起を形成、その左右から沈線が配されている。このB状突起（図正面）の上に長さ5㎝、幅1.5㎝ほどの粘土が剥落した部分がある。突起部がつけられていた可能性がある。体部には0段多条の非常に細いLR原体による斜行縄文が施され、上下を沈線文で区画した中に入組文が施されている。器厚は5㎜と薄手で焼成は良好。色調は口縁部が淡い黒褐色を呈する。胎土は精製されており、海綿骨針をごくわずかに含む。口縁部内面には炭化物が付着する。

これらは大洞C_2～大洞A式と考えられるものである。

（3）石　器（図Ⅲ－7、図Ⅲ－8～10－1～14、表Ⅲ－4、図版6・7）

出土した石器は両面加工のナイフ、石斧、たたき石、軽石製の砥石である。

両面加工のナイフ（1）

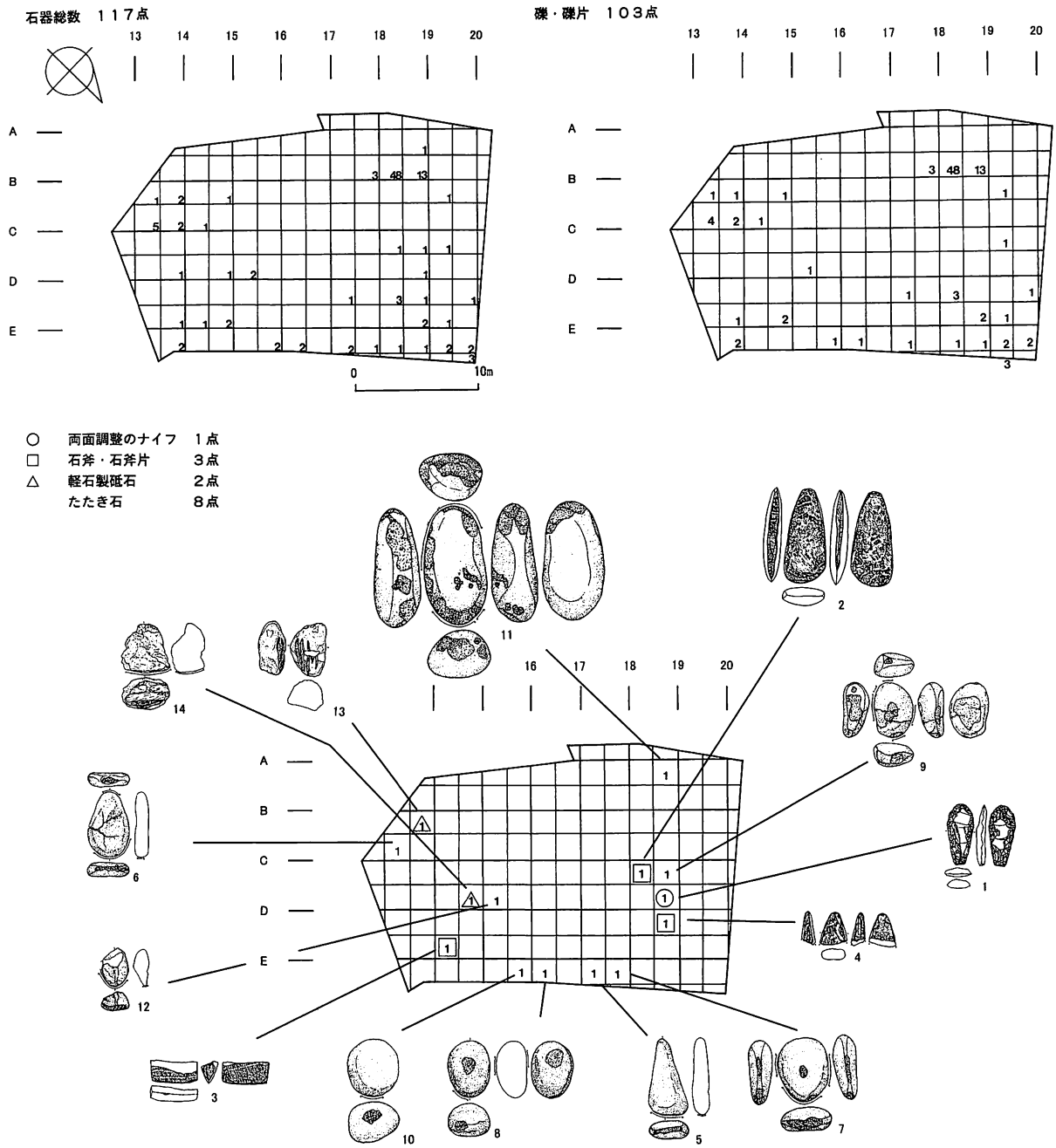
1はⅣ層上位から出土した頁岩製のもの。両面調整により湾曲する刃部をもつものである。基部から3分の2ほどの範囲はやや厚みがありこの部分を粗く調整している。柄をつけた部分であろう。背腹面に一次剥離面が残る。

石　斧（2～4）

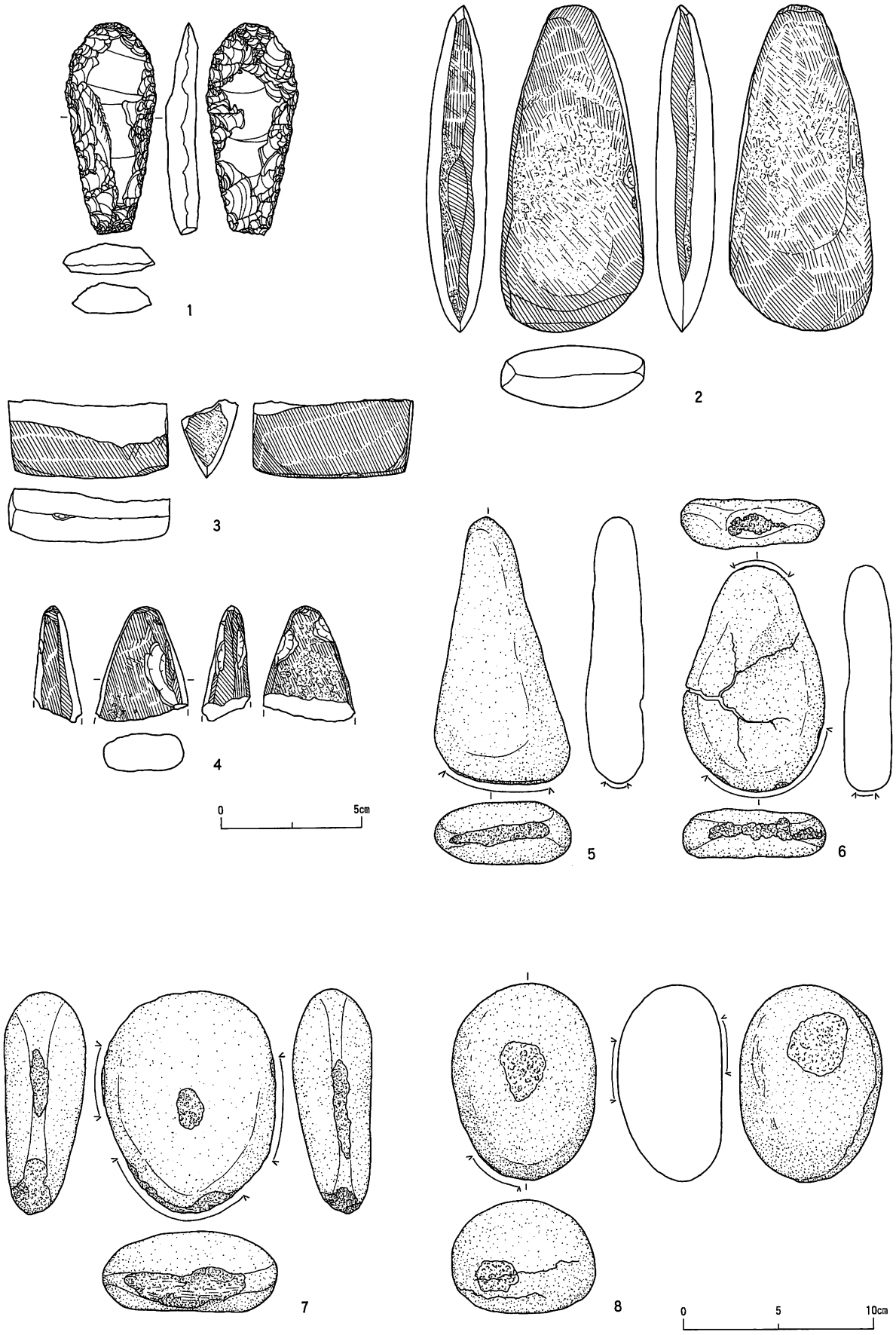
3点出土した。いずれも泥岩製。2はⅣ層中位で出土した。入念に研磨されているが基部を中心に両面に敲打調整痕を残す。丸みを帯びた両刃で、刃先は片べりである。3はⅣ層1回目で出土した。研磨調整された直線的な刃部をもつ。熱を受けたとみられ、破損部は赤みを帯びている。刃部はやや偏る。4はⅣ層上位で出土した。敲打痕が残る基部の破片。

たたき石（5～12）

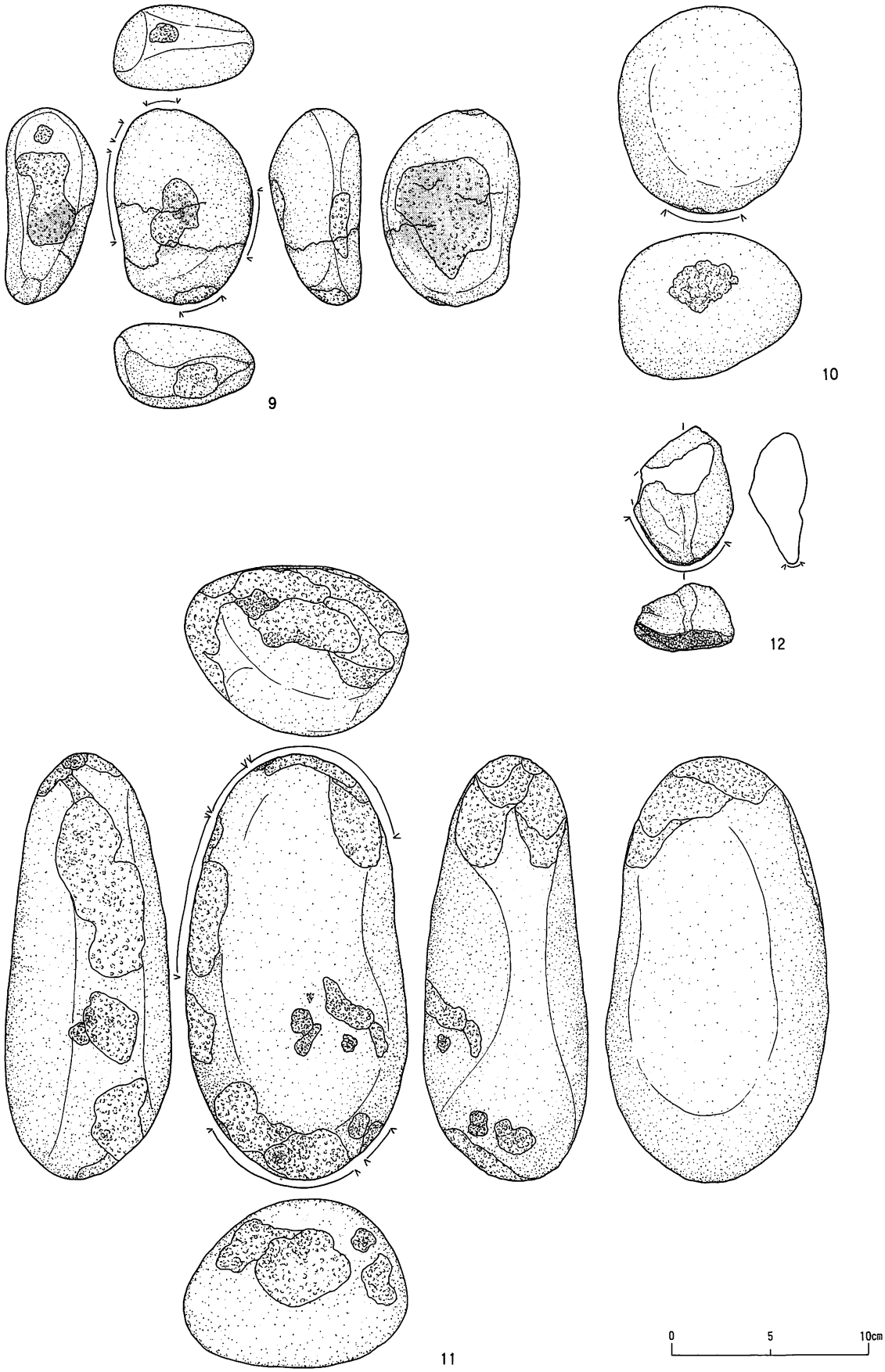
8点出土した。Ⅳ層上位2点（5、11)、Ⅳ層中位2点（7、12)、Ⅳ層3回目（6）でこのほかのものはⅣ層下位から出土した。5～7は楕円形、不定形の扁平礫を使用するもので、5は一端に、6は長軸上の両端、7は側縁のところどころと平坦面の1か所にいずれも浅い敲打痕がある。6は熱を受けている。8・10は球形に近い礫である。8は背・腹面と端部1か所に、10は端部に使用痕がある。



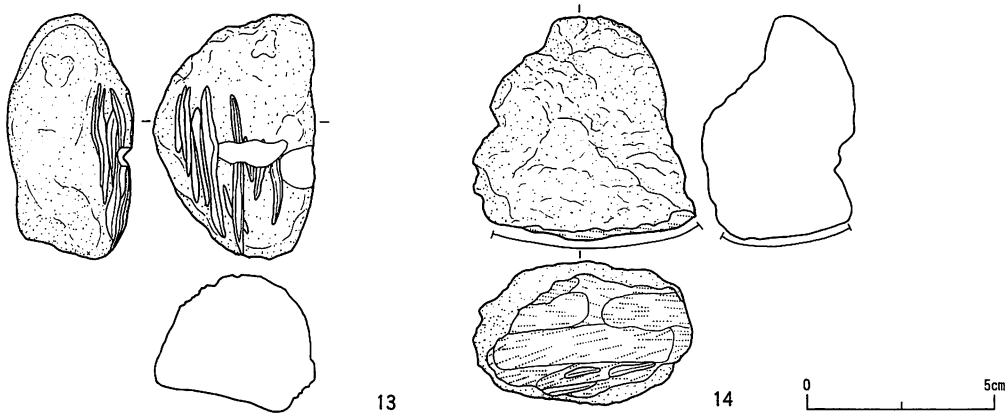
図Ⅲ－７　石器等の分布　石器総数　礫・礫片　両面加工ナイフ・石斧・たたき石・砥石



図Ⅲ－8　包含層出土の石器（1）ナイフ・石斧・たたき石



図Ⅲ－9　包含層出土の石器（2）たたき石



図Ⅲ－10　包含層出土の石器（3）砥石

9、12は歪な形状のもので、9はほぼ全面のところどころに、12は幅の狭い側縁に連続して敲打痕が観察される。9は火を受けているもので、網掛けの部分は黒色の物質が付着している範囲である。11はやや持ち重りがする大型の礫で、側縁のほぼ全周と両端に不規則にまた図正面の一部に敲打痕がある。9が凝灰岩（？）製、12が砂岩製、その他は安山岩製である。

砥　石（13、14）

2点出土した。13はⅣ層上位、14はⅣ層2回目で出土した。13は断面がV字状の幅1、2㎜の細い溝が7、8条ある。14には図下側にややくぼんだ使用面があり、13に類する細い溝も3条ある。いずれも拳大の軽石である。

礫・礫片

図示してはいない。礫は38点出土した。砂岩や泥岩のものがわずかにあるが、多くは安山岩である。重さ30g前後のものから、1,200gを超えるものまであるが、8割近い24点が掌に収まる大きさの100g未満のものである。これらは本来的には遺跡には存在しないものであり、持ち込まれたものである。礫片65点のうちⅦ層から検出されたものは火山起源のものである。　（遠藤香澄）

3　小　　括ー土器についてー

２か年の調査で得られた土器は4,436点である。円筒上層b式から見晴町式までの中期前半のものが最も多く、ほかに縄文前期後半円筒下層d式のもの、晩期のものがわずかにある。

今年度の調査では中期前半期のサイベ沢Ⅶ式相当するもの125点と晩期中葉末～後葉の大洞C_2式～A式頃に相当するもの215点が検出された。中期の資料は平成14年度の調査区から続く台地の縁辺にそって、弧を描くよう広く分布するが、Eラインよりも西側ではほとんど出土しない。晩期のものはほぼ１か所に集中している。

中期の復元された土器図Ⅲ－４－１aや図Ⅲ－４－９は細い貼付帯で文様が描かれるもので、これらは「サイベ沢Ⅶ式の古い段階」（北埋調報181）に相当するものである。貼付帯に施文のないもの（９）はより新しい可能性がある。Ⅲ－４－３a～３dにみられる小さな突起部を持つ縄文の施された資料は「サイベ沢Ⅶ式の新しい段階」の可能性がある。

晩期の土器は３個分の資料が得られている。図Ⅲ－５－１a～eは最大胴径が最大径であることを特徴とする深鉢形の土器である。七飯町の峠下聖山遺跡の報告で「基本的プロファイルa－４類」とされた（芹澤編1979）、比較的幅の狭い無文の口頸部を有する器形に類するものであろう。この土器は土器片の器面外側が上がり、内面側が下がるという粘土の接合面が観察された。この時期の特徴をよく示す資料である。図Ⅲ－６－３aはS字形「右巻入組文」とZ字形「左巻入組文」の連携した文様のものである（芹澤編1979の文様模式図89）。頸部と胴部の境にある粘土の剥離した部分には、斜め上にまっすぐと延びる把手状の突起があったものとみられる。台付き鉢の可能性もある。図Ⅲ－６－２を含めこれらは出土位置、出土状況からも同時期、大洞C_2～A式頃に相当するものと考えて良い。なお、平成14年度の調査で壺形土器が出土している（北埋調報191）。80mほど離れた地点のものであるが、この資料も同時期のものと、とらえておきたい。　　（遠藤香澄）

表Ⅲ－1　取り上げ層位別出土遺物一覧

遺物名＼層位	Ⅲ層上位	Ⅲ層下位	Ⅳ層1回目	Ⅳ層2回目	Ⅳ層3回目	Ⅳ層4回目	Ⅳ層上位	Ⅳ層中位	Ⅳ層下位	Ⅶ層	風倒・表採	
Ⅲ群a類土器				4	73	8	3	24	11		2	125
Ⅴ群b類土器	7	18	3	1	14			167	4		1	215
両面加工のナイフ							1					1
石斧・石斧破片			1				1	1				3
たたき石・たたき石片						1	2	2	3			8
砥　石				1			1					2
礫	2		4	6	8	4	3	6	5			38
礫片								2	1	62		65
合　計	9	18	8	12	95	13	11	202	24	62	3	457

表Ⅲ－2　包含層出土掲載土器一覧（復元土器）

図番号	接合状況 遺物番号・層位・点数	同一個体破片 遺物番号・層位・点数	分類	図版番号
図Ⅲ－4－1a	D-18-c-1Ⅳ②×1、D-18-c-2Ⅳ③×57、D-18-c-4Ⅳ④×4、D-19-b-1Ⅳ中×11、E-18-d-1Ⅳ中×1、E-18-d-4Ⅳ下×1、未注記×1 合計77点	D-18-c-1Ⅳ②×1、D-18-c-2Ⅳ③×10、D-18-c-4Ⅳ④×3、D-19-b-14中×5、E-18-a-3Ⅳ下×1、E-18-d-1Ⅳ中×1、未注記×8 合計29点	Ⅲa	図版5－2
図Ⅲ－5－1a	C-13-c-1～17・20・22～24・26・27・29・40～44・46・48～50・52・53・55～57・59～62・64・65・69・70・72～78・83～85・87～99・101～103 いずれも層位はⅣ中　計103点 C-13-c-104Ⅳ下×2、C-13-c-105Ⅳ下×1、C-13-c-106風倒×1 合計107点	（接合）C-13-c-54Ⅳ中×2、C-13-c-63Ⅳ中×2、C-13-c-66Ⅳ中×1、C-13-c-67Ⅳ中×3、C-13-c-68Ⅳ中×1、C-13-c-71Ⅳ中×2　計11点 (接合) C-13-c-18Ⅳ中×1、C-13-c-33Ⅳ中×1、C-13-c-103Ⅳ中×2　計4点 (接合) C-13-c-21Ⅳ中×1、C-13-c-103Ⅳ中×1　計2点　(接合) C-13-c-34Ⅳ中×1、C-13-c-35Ⅳ中×1　計2点 C-13-c-25・30・31・36・37・39・40・51・54・79・82・84・86・103・未注記 いずれも層位はⅣ中　計51点 合計70点	Ⅴb	図版4－4・5
図Ⅲ－6－3a	C-13-c-19Ⅳ中×1、C-13-c-47Ⅳ中×1、C-13-c-103Ⅳ中×3、C-14-b-1Ⅲ下×1、C-14-c-1Ⅲ上×5、C-14-c-2Ⅲ下×17、D-14-a-1Ⅳ①×1、D-14-d-1Ⅳ①×1、D-14-d-2Ⅳ①×1、D-14-d-3Ⅳ③×12 合計43点		Ⅴb	図版6－1

表Ⅲ－3　包含層出土掲載土器一覧（拓本）

図番号	遺物番号	層位	分類	図版番号	備　　考
図Ⅲ－4－1b	D-18-c-1	Ⅳ2回目	Ⅲa	図版5－3	復元土器（図Ⅲ－4－1a）と同一
図Ⅲ－4－1c	D-19-b-1	Ⅳ層中	Ⅲa	図版5－3	〃
図Ⅲ－4－2	E-15-a-1	Ⅳ層下	Ⅲa	図版5－3	突起部
図Ⅲ－4－3a	E-18-a-1	Ⅳ層中	Ⅲa	図版5－3	同一個体
図Ⅲ－4－3b	E-18-a-3	Ⅳ層下	Ⅲa	図版5－3	〃
図Ⅲ－4－3c	E-18-a-11	Ⅳ層中	Ⅲa	図版5－3	〃
図Ⅲ－4－3d	E-15-d-1	Ⅳ上	Ⅲa	図版5－3	〃
図Ⅲ－4－4	B-17-c-11	Ⅳ層下	Ⅲa	図版5－3	突起部
図Ⅲ－4－5	表採		Ⅲa	図版5－3	
図Ⅲ－4－6	C-19-a-2×2	Ⅳ風倒	Ⅲa	図版5－3	
図Ⅲ－4－7	E-15-d-3	Ⅳ層下	Ⅲa	図版5－3	
図Ⅲ－4－8	E-15-d-1	Ⅳ上	Ⅲa	図版5－3	
図Ⅲ－4－9	E-18-d-1	Ⅳ層中	Ⅲa	図版5－3	
図Ⅲ－4－10	E-18-d-3	Ⅳ層下	Ⅲa	図版5－3	
図Ⅲ－4－11	A-19-a-1	Ⅳ層下	Ⅲa	図版5－3	
図Ⅲ－4－12	E-18-d-3	Ⅳ層下	Ⅲa	図版5－3	

図番号	遺物番号	層位	分類	図版番号	備　　考
図Ⅲ－5－1 b	C-13-c-28×1、C-13-c-30×5、C-13-c-32×1、C-13-c-80×1、C-13-c-81×1、C-13-c-100×1、C-13-c-103×1、未注記×2　計13点	Ⅳ層中	Ⅴb	図版5－1	復元土器（図Ⅲ－5－1a）と同一
	C-13-c-105×1	Ⅳ層下			
図Ⅲ－6－1 c	C-13-c-37×2	Ⅳ層中	Ⅴb	図版4－5	〃
図Ⅲ－6－1 d	C-13-c-45×1、C-13-c-58×1	Ⅳ層中	Ⅴb	図版4－5	〃
図Ⅲ－6－1 e	C-13-c-86×1、C-13-c-103×1	Ⅳ層中	Ⅴb	図版4－5	〃
図Ⅲ－6－2	C-13-c-103×1、	Ⅳ層中	Ⅴb	図版4－5	突起部
図Ⅲ－6－3 b	C-13-c-19×1、C-13-c-47×1、	Ⅳ層中	Ⅴb	図版4－5	復元土器（図Ⅲ－6－3 a）の部分

表Ⅲ－4　包含層出土掲載石器一覧

図番号	器種名	発掘区	遺物番号	出土層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石　質	備　考
図Ⅲ－8－1	両面加工のナイフ	C-18-c	1	Ⅳ層上	7.39	3.28	1.04	25.8	頁岩	
図Ⅲ－8－2	石斧	C-18-a	1	Ⅳ層中	11.4	5.1	2.0	178.0	泥岩	
図Ⅲ－8－3	石斧片	D-14-b	1	Ⅳ層1回目	(2.7)	(5.6)	(1.6)	(35.9)	泥岩	刃部のみ
図Ⅲ－8－4	石斧片	D-18-d	1	Ⅳ層上	(4.0)	(3.3)	(1.4)	(21.4)	泥岩	基部のみ
図Ⅲ－8－5	たたき石	E-17-a	1	Ⅳ層上	13.9	7.1	3.2	360.0	安山岩	
図Ⅲ－8－6	たたき石	B-13-b	3	Ⅳ層3回目	11.8	7.5	2.4	314.0	安山岩	被熱
図Ⅲ－8－7	たたき石	E-17-d	1	Ⅳ層中	11.7	9.1	4.1	520.0	安山岩	
図Ⅲ－8－8	たたき石	E-16-b	1	Ⅳ層下	10.3	7.5	5.4	562.0	安山岩	被熱
図Ⅲ－9－9	たたき石	C-18-d	1	Ⅳ層下	9.3	7.6	3.7	350.0	凝灰岩(？)	被熱
図Ⅲ－9－10	たたき石	E-15-d	4	Ⅳ層下	10.4	9.3	7.1	960.0	安山岩	
図Ⅲ－9－11	たたき石	A-18-d	1	Ⅳ層上	21.2	11.3	8.5	2600.0	安山岩	
図Ⅲ－9－12	たたき石片	C-15-b	2	Ⅳ層中	6.9	5.0	3.0	83.8	砂岩	
図Ⅲ－10－13	砥石	C-14-c	3	Ⅳ層上	6.4	4.3	3.2	38.9	軽石	
図Ⅲ－10－14	砥石	B-13-d	1	Ⅳ層2回目	5.9	5.9	3.8	91.0	軽石	

引用・参考文献

石本省三　1982『森川A遺跡ー縄文時代前期住居址の調査ー』森町教育委員会

小山正忠・竹原秀雄　1997『新版標準土色帖1997年度版』日本色研事業株式会社

日下　哉編著　2002『図解日本地形用語辞典』東洋書店

久保　泰　1977『森町オニウシ遺跡発掘調査報告書』森町教育委員会

熊野喜蔵・八木光則　1974「茅部郡森町森川A遺跡出土の前期縄文式土器群」『北海道考古学』第10輯

(財) 北海道埋蔵文化財センター　1985『湯の里遺跡群』北埋調報18

(財) 北海道埋蔵文化財センター　1983『木古内町新道４遺跡』北埋調報52

(財) 北海道埋蔵文化財センター　2000『八雲町シラリカ２遺跡』北埋調報142

(財) 北海道埋蔵文化財センター　2003a『八雲町落部１遺跡』北埋調報181

(財) 北海道埋蔵文化財センター　2003b『森町本内川右岸遺跡』北埋調報182

(財) 北海道埋蔵文化財センター　2003c『森町濁川左岸遺跡ーB地区ー』北埋調報190

(財) 北海道埋蔵文化財センター　2003d『森町本茅部１遺跡』北埋調報191

(財) 北海道埋蔵文化財センター　2003e『調査年報15　平成14年度』

(財) 北海道埋蔵文化財センター　2004『森町倉知川右岸遺跡』北埋調報196

佐々木利和編・山田秀三監修　1988『アイヌ語地名資料集成』草風館

佐藤忠雄編　1979『鳥崎遺跡』森町教育委員会

菅江真澄著　内田武志・宮本常一編訳　1980『菅江真澄遊覧記』２　平凡社

芹澤長介編　1979『峠下聖山遺跡』七飯町教育委員会

武内理三編　1987『角川日本地名事典』１　北海道　上・下巻　角川書店

千代　肇・三浦孝一・石本省三・長谷部一宏ほか　1981『尾白内ー続縄文遺跡の調査研究ー』森町教育委員会

永田方正　1984『初版　北海道蝦夷語地名解』復刻版　草風館

永井秀夫編　2003『北海道の地名』日本歴史地名体系　第１巻　平凡社

野村　崇　1985『北海道縄文時代終末期の研究』みやま書房

藤田　登　1985『御幸町』森町教育委員会

藤田　登　1993『尾白内２ー続縄文遺跡の調査研究ー』森町教育委員会

藤田　登　1994『御幸町２』森町教育委員会

藤田　登・荻原幸男編　2002『鷲ノ木４遺跡・栗ヶ丘１遺跡発掘調査概要報告書』森町教育委員会

ペトロジスト懇談会編　1984『土壌調査ハンドブック改訂版』

北海道開拓記念館編　1979『熊野喜蔵氏資料目録・Ⅰ』北海道開拓記念館一括資料目録第12集

北海道開拓記念館編　1980『熊野喜蔵氏資料目録・Ⅱ』北海道開拓記念館一括資料目録第13集

北海道開拓記念館編　1999『北の台地』常設展示解説書

北海道教育庁生涯学習部文化課編　2002『市町村における発掘調査の概要』

北海道教育庁生涯学習部文化課編　2003『市町村における発掘調査の概要』

北海道考古学会編　2003『2003年度　遺跡調査報告会資料集』北海道考古学会

北海道編　1969『新北海道史』第七巻史料一　北海道

松浦武四郎著・吉田武三校註　1970『三航蝦夷日誌』上巻　吉川弘文館

松浦武四郎著・秋葉　實解読　1988『武四郎蝦夷地紀行』北海道出版企画センター

松浦武四郎著・秋葉　實翻刻・編　1999『校訂蝦夷日誌一編』北海道出版企画センター
三浦孝一　1987『台の上遺跡』八雲町教育委員会
山内清男　1967『日本遠古之文化』山内清男・先史考古学論文集第一冊　先史考古学会
山田秀三　1984『北海道の地名』北海道新聞社
山田秀三　2000『北海道の地名ーアイヌ語地名の研究ー　別巻』草風館
森町編　1980『森町史』森町
吉崎昌一・直井孝一・松岡達郎他　1979『聖山』七飯町教育委員会

1　遺跡全景Ko－d除去後（北西から）

2　基本土層（北東から）

図版 2

1　調査状況（北西から）

2　完掘状況（北西から）

1　F－1検出（北から）

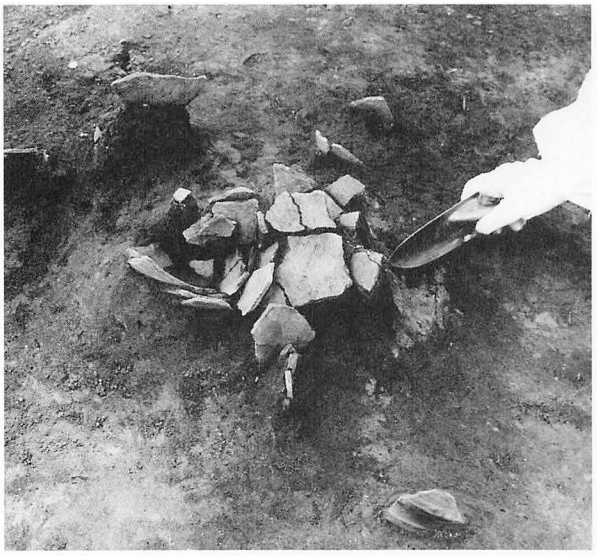
2　F－1土層断面1（北から）

3　F－1土層断面2（南から）

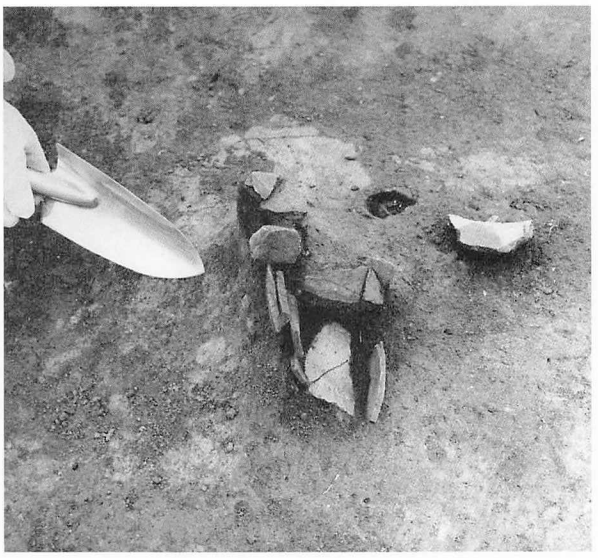
4　晩期の土器出土状況（1）（西から）

5　晩期の土器出土状況（2）（北から）

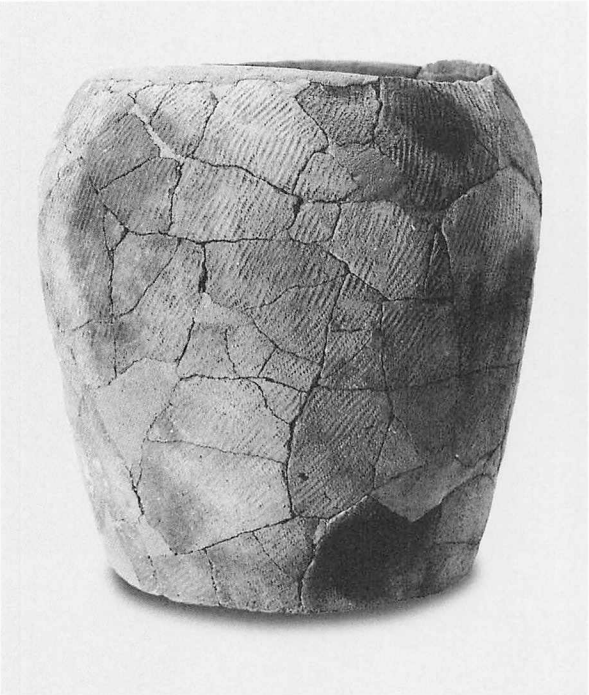
図版４



1　晩期の土器出土状況（３）（南から）

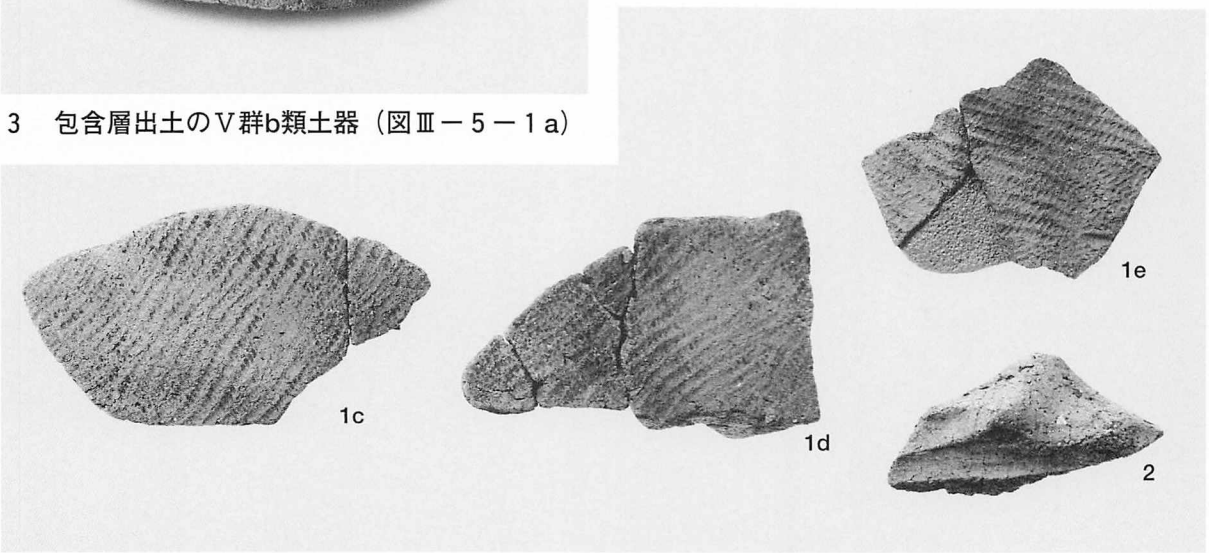


2　晩期の土器出土状況（４）（西から）

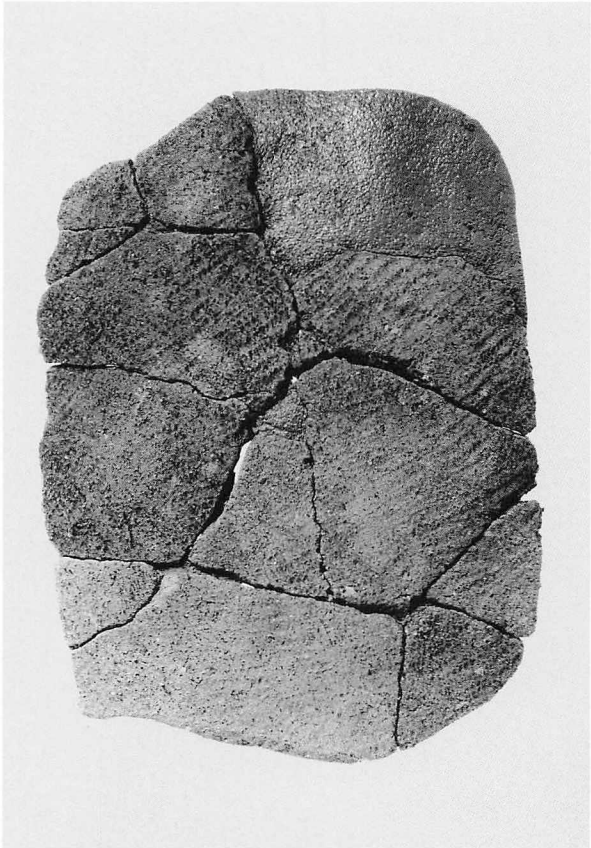


3　包含層出土のⅤ群b類土器（図Ⅲ－５－１a）

4　粘土の接合面（同左）

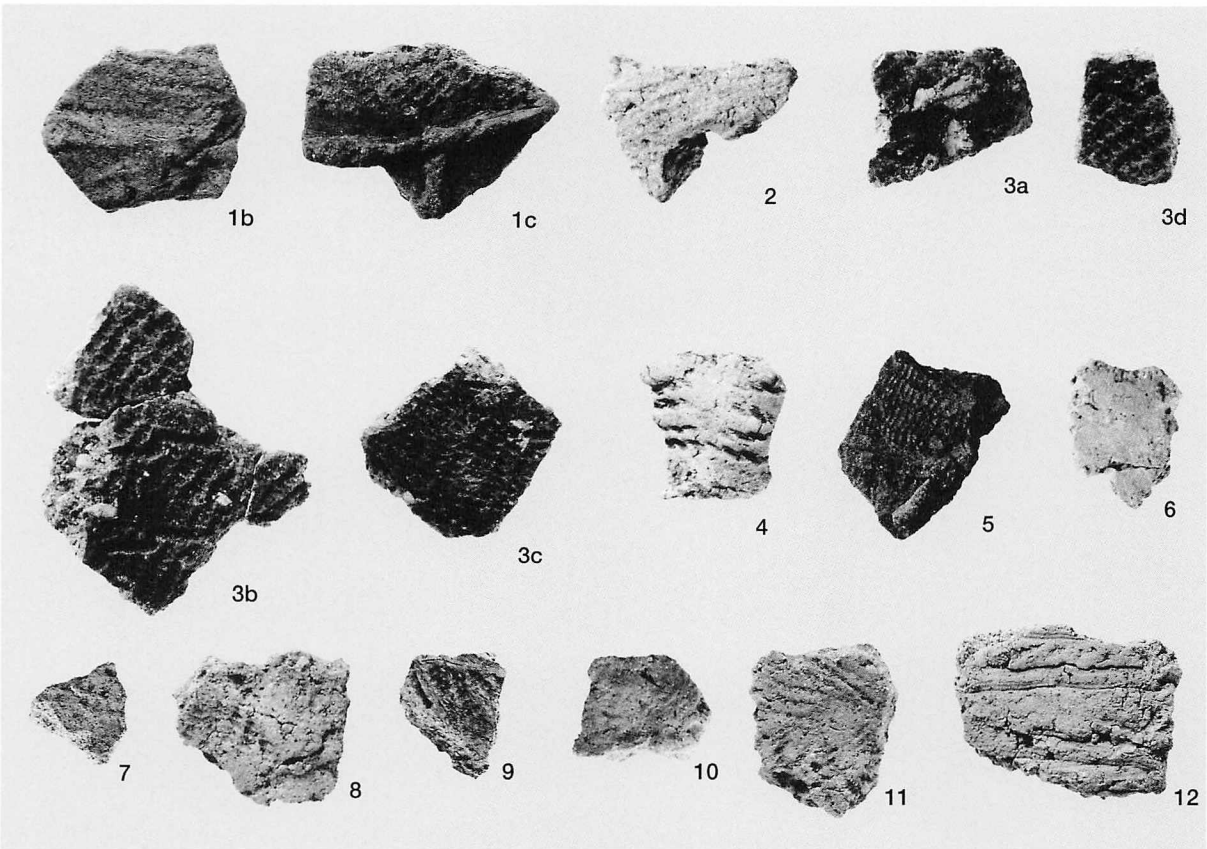


5　包含層出土のⅤ群b類土器



1　包含層出土のⅤ群b類土器（図Ⅲ－５－１b）

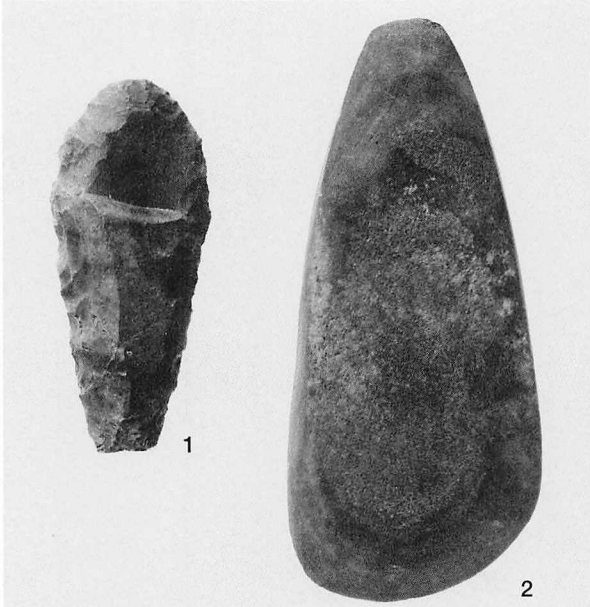
2　包含層出土のⅢ群a類土器（図Ⅲ－４－１a）

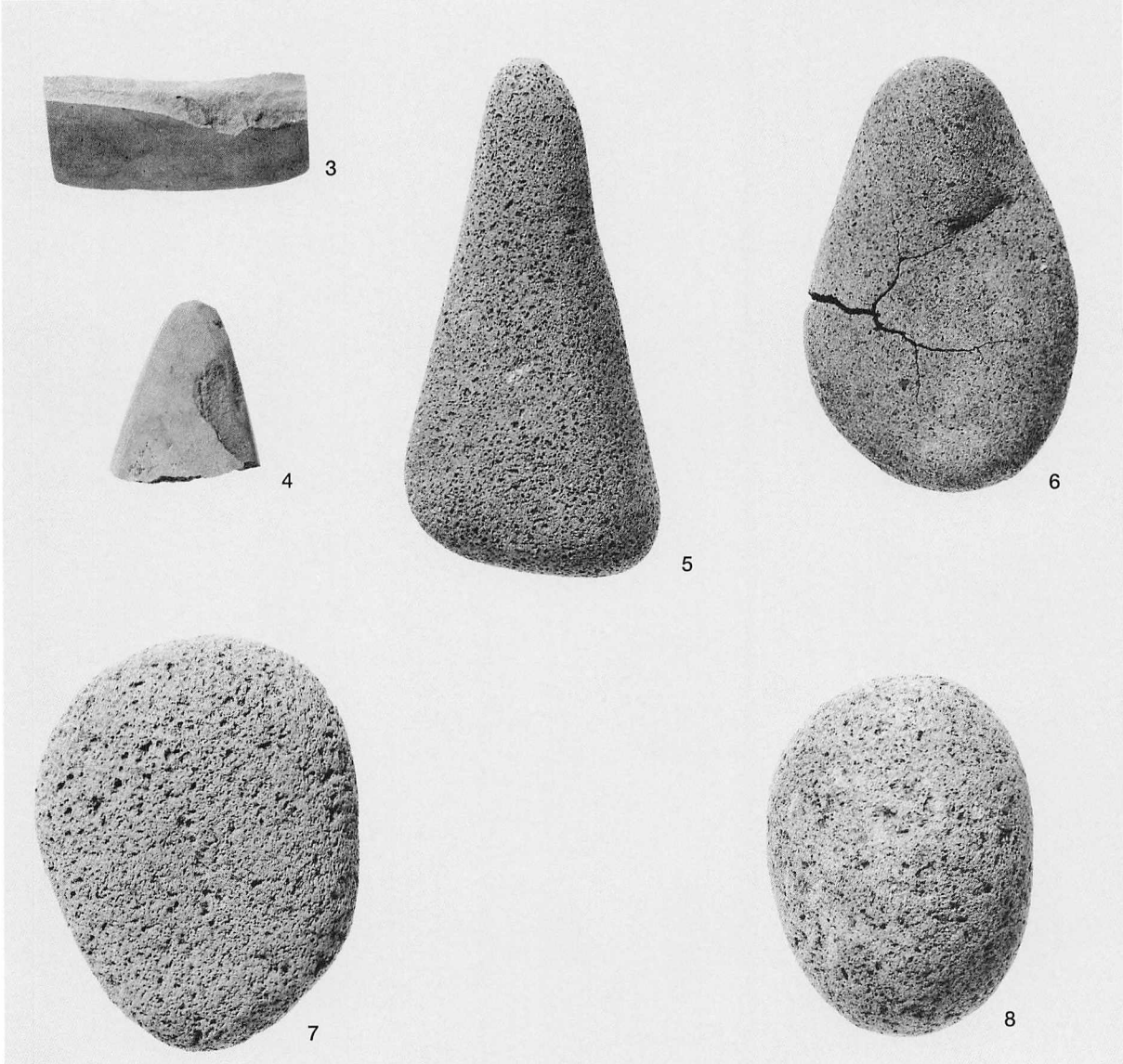


3　包含層出土のⅢ群a類土器

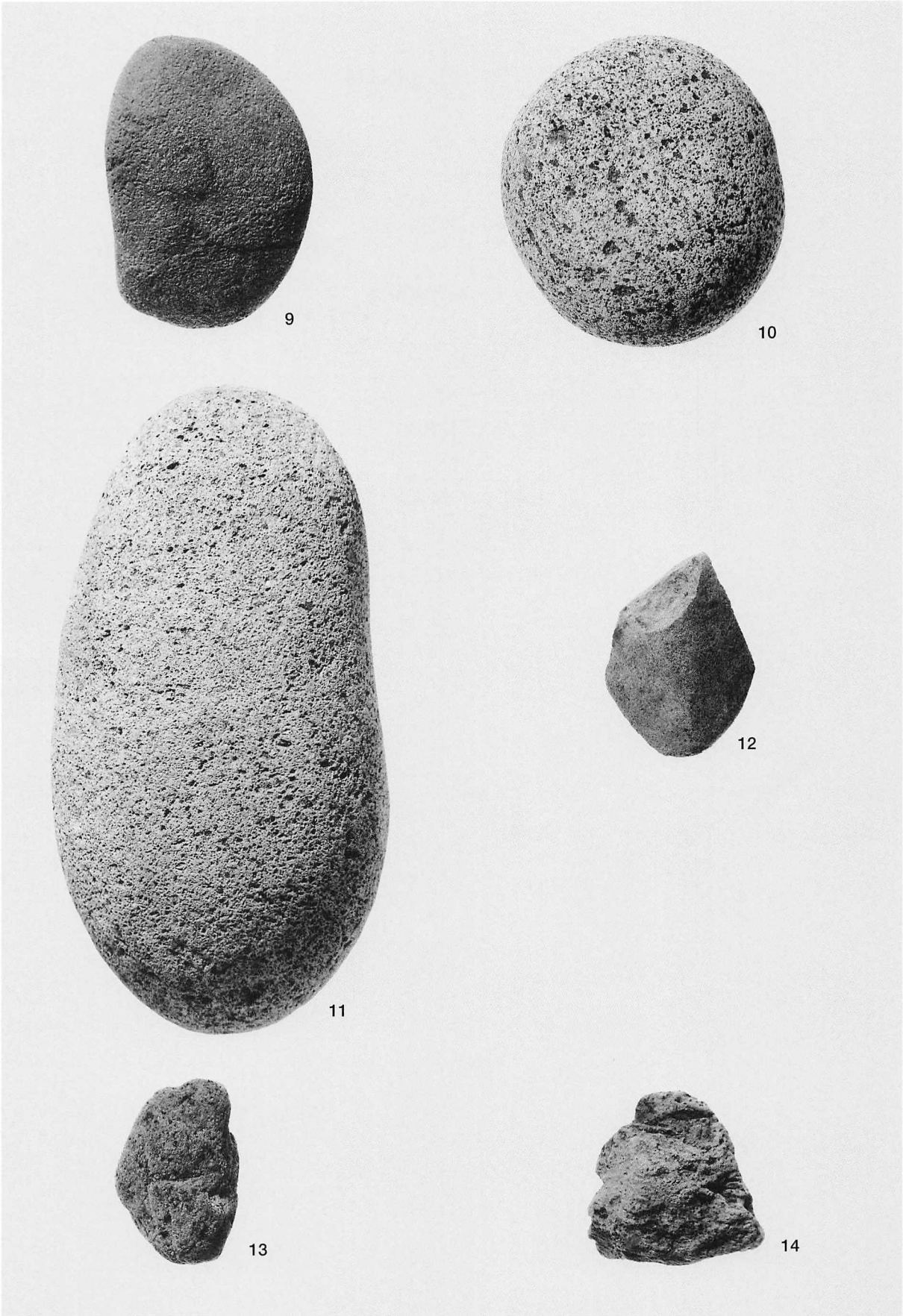
図版 6

1　包含層出土のⅤ群b類土器（図Ⅲ－6－3a）





2　包含層出土の石器（1）両面加工のナイフ・石斧・たたき石



1　包含層出土の石器（2）たたき石・砥石

報告書抄録

ふ り が な	もりまち　ほんかやべいちいせき　　に
書　　名	森町　本茅部１遺跡（2）
副 書 名	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第199集
編 著 者 名	遠藤香澄・芝田直人・山中文雄
編 集 機 関	(財)北海道埋蔵文化財センター
所　在　地	〒069－0832　北海道江別市西野幌685－１　TEL 011-386-3231
発 行 年 月 日	西暦2004年3月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほんかやべいちいせき 本茅部1遺跡	ほっかいどうかやべぐん 北海道茅部郡 もりまちあざほんかやべ 森町字本茅部274 ほか	01345	B－15－23	42° 08′ 24″	140° 29′ 53″	20030506～ 20030606	498㎡	高速道路北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本茅部1遺跡	遺物包含地	縄文時代中期・晩期	焼土１か所	縄文土器340点（サイベ沢Ⅶ式、大洞C2～A式） 石器等　117点（頁岩製ナイフ、石斧・石斧片、たたき石、軽石製砥石、礫・礫片）	

㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第199集

森町　本茅部１遺跡（2）

―北海道縦貫自動車（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成16年3月19日発行

編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832　江別市西野幌685番地－1
TEL（011）386-3231　FAX（011）386-3238
［E-mail］mail@domaibun.or.jp
［URL］http://www.domaibun.or.jp

印　　刷　札幌大同印刷株式会社
〒004-0003　札幌市厚別区厚別東３条２丁目
TEL（011）897-9711